
とこしえの黄昏の国

HALA

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とこしえの黄昏の国

【Nコード】

N4887Y

【作者名】

H A L・A

【あらすじ】

地の涯にはとこしえの黄昏の国があり、そこには夜も昼もないという。

父親から聞かされたその話を、信じていなかったといいながら、それでも娘は旅に出た。

彼女が世界の涯へ向かう旅の途上で見たもの、そして涯の地で出会ったものとは。

※ 自サイトからの転載になります。

とこしえの黄昏の国

地の涯には、とこしえの黄昏の国がある。

若い頃から放浪の旅をくりかえしてきたというアシェリ、私の父親からその話を聞いたときには、またいつにもまして荒唐無稽な法螺話をするものだ、と、呆れかえったことだった。

生まれ育った故郷の地を、遠く離れて旅をするということ自体が、すでに狂気の沙汰だというのに、まして地の涯までいこうという。実の娘の私にも、いったいなにを考えているのか、さっぱりわからなかった。ろくでもない男だ。……ああ、お前には祖父にあたる男のことを、あまり悪くいうのも何だがね。まあ幸い、お前はアシェリには似なかったようだ。

母もまた、アシェリのその悪癖には、随分と悩んだようだった。だが、よその男がそうするように、目と鼻の先でよく知っているほかの女の寝床に通うよりも、まだ知らない土地で、見知らぬ女のあいだをさまよい歩いているというほうが、いくらかは気の休まることではあったらしい。その気持ちは、いまとなってみれば、私にも少々わかる気がする。ああ、別にお前のことを、あてこすっているわけではないさ。そもそも男というのはそういうものなんだろう。そら、男がそういう顔をするものじゃない。情けないったらありやしない。そういえば、なんという名前だったかね、あの機織の、気立てのいい娘は、息災にしているかね。そうか。孫たちも、みんな元気なんだろう？ それならいい。

話を戻そう。アシェリに限らず、私の故郷の人々は、ときには旅くらいするし、ここの人たちがそうするように、場合によっては移住もする。だがそれは、歩いて数日、そうでなければ灰鱗馬に乗って日のあるうちにというようなものだ。ここいらは道がいいから、それよりは少し遠出もするかもしれないが、それにしても限度がある。ひと月もかけて旅をしてきたというような変わり者がいるとす

れば、ミシエゴの民の行商くらいのものでらうよ。彼らだって、荷をやりとりするために、街道にそって往復するのがせいぜいだ。道なき道を往ってまで、違う言葉を話す人々がいるとかいう、見知らぬ土地になど、そうそう足を突っ込むものではない。

まして、私の故郷からは、ちよつと北へと向かえば、異相の獣が吼え声を上げる、この世のものとも思えないおそろしい森が広がっているし、といって南へと向かえば、やがて河がもうもうと湯気を上げ、半刻もあれば人が蒸し焼きになって湯気を上げるような、灼熱の大地が顔を出す。そんな土地を旅するアシェリのことを、故郷の人々はみな口を揃えて狂人だといったし、娘である私自身が、ほかの誰よりもそう思っていた。

それなのになぜ、私は涯の地なんていうものを目指したのだろうかね。

アシェリがさも面白おかしく語る、荒唐無稽な風聞が、魅力的に聞こえたからというわけでは、なかったように思う。むしろ、旅先で灼熱の陽射しに焼かれて、同じ年頃のほかの男たちよりもよほど早く皺だらけになったアシェリの肌や、何度か山越えをしたときに吹雪に襲われたせいで、手足の指が何本も欠け落ちてしまっていることや、そういうものをこそ、私はこの目でまじまじと見てきた。

月が何度巡っても、家に戻ってこないアシェリ。よその家の父親は、どれほど愛情の醒めた無精な男であっても、ひと月に数日は顔をみせるものなのに、その義務さえ果たそうとしないろくでなしの父親。だが私は、なぜかあの男が好きだった。

もっと頻繁に家にやってきて、私にもたっぷりの愛情を注いでくれる、ほかの弟妹の父親がいたというのにな。気まぐれにしか顔を出さず、出しても途方もないような法螺話ばかりを自慢げに垂れ流すだけで、頭ひとつなでてくれるでもないアシェリのほうが、私はずっと好きだった。弟妹たちは、アシェリのことを気味悪がって、なかなか近寄ろうとはしなかったというのに。

それは血のなせるわざだろうか。母はそう信じ込んでいるふしが

あつたけれど、私にはその考えは、どうにもしつくりとこない。

私がアシェリを好きだった理由はともかく、たしかに私はあの男の血を引く娘であるらしかった。そもそも女の身で一人旅に出ようということ自体が、狂気の沙汰としか思えない。皆が口を揃えてそういったし、自分でもそう思った。もつとも、美しい母ではなく、どこもかしこも無骨でおおづくりな造作のアシェリに似てしまった私は、顔にせよ体格にせよ、女だからという理由で、身の危険を感じるようなものでもなかったがね。なんせ、母以外の誰一人、私が旅先で遭難することを心配こそすれ、旅先でどこぞの男に襲われてもしたらという想像のほうは、ちつともしなかったのだから。

けれど実際のところ、ところが変われば美しさの基準も変わるものらしい。故郷では自他ともに認める醜女だったはずの私が、遠い異国の地では、何度か一目ぼれもされたし、これでけっこう、求愛もされた。いま、笑ったな。まあ、信じなくてもいいさ。

ともかく、そういう意味では、身の危険は覚えなかったな。というのも、私は女だてらに、腕っ節もまあまあ強かった。いまでこそ、歳をとってこの有様だけれど、狼藉者の二、三人くらいは、簡単に追っ払って見せたものさ。怖いのは人間ではなくて、森や岸壁や砂漠に棲む、爪や牙の鋭い獣や、おそろしい毒をもつ虫たちのほうだった。それでもこうしてこの歳まで生きているのだから、私は相当に幸運な部類なのだろうね。なんせ、アシェリが死んだのは、噂を信じれば、いまの私の半分ほどの歳だったのだから。それでも最後に会ったあの男は、実際よりもずっと老いて見えたものだったが。

そういえば、デッタルタよりも東の地に住む人間は男も女もみな頑健で腕が立つとか、そういうような噂が、一時期このあたりで広まったようだった。あれはもしかすると、私のせいではなかったかな。実際は、こちらの人々と同じように、故郷の女たちはか弱いものだった。私が変わり者だったのさ。

ああ、年寄りの話は、すぐ脇道に逸れてよくないな。ともかく、若かりし私は、その地の涯とかいう場所を目指したのだ。アシエリの語った道筋を追って、おそろしい獣の棲む北の森を抜け、自分の倍ほどもあろうかという背丈をした船頭の漕ぐ渡し舟に乗り、ゲルガ大河を渡って、雪と氷に閉ざされたシジ・シャガラ連峰を越えた。右足の指が二本欠けているのを、お前には見せたことがあるだろう。あれも、アシエリと同じように、高い山の上で吹雪に見舞われた結果だった。

ああ、雪をお前は知らないか。無理もない。そうだね、寒い土地では、雨が凍って雪というものになるのだよ。

凍る、がわからないか。そうだね、水がうんと冷えると、塊のようになるのだよ。雪というものは、軽くて、白くて、ふわふわと風に流されて降ってくる。小さくて、指で触るとあつという間に溶けて消えてしまう。けれど、ときには殴りつけるように降り、驚くほど厚く降り積もる。触ると、優しく包んでくれそうな外見を裏切つて、鋭いほどに痛い。それほどに冷たいのだよ。手足が冷たいまま、ずっとほうっておくと、指が腐れて落ちることもある。ああ、想像もつかないか。まあ、それならそれでいいさ。

なんでそこまでしたのかって？ さて、あまりちゃんと考えてみたことはないな。

ああ、だが多分私は、知りたかったのだろう。わが父アシエリ、あのほら吹き、気狂いの、腰の据わらない薄情な男が、愛した女と娘を置いて、遙かな地にある何を見たかったのか。いったい、遠くの地にある何が、アシエリに私たちを捨てさせたのかを。

あるいは私自身が、故郷の地にうんざりしたからだったかもしれない。いまにしてみれば懐かしい故郷だが、それでもあの町に戻りたいとは思わない。ああ、そりゃあ、一人で遠くまで旅に出ようと思うほどの変わりものだからね、色々と悶着もあったのさ。ちょうど弟妹たちが大きくなって、手がかからなくなったのも、いいきっかけだった。

だからといって、同胞と離れて、一人っきりで生きようなんて思う人間は、そうはいないさね。だが私の場合は、ほかに逃げる道があるということを、父親が体現してみせていた。いや、考えてもみればアシエリの場合は、それでもたまには帰ってきてはいたのだから、私ほどには薄情でもなかったのだろう。

アシエリは面白がって、私に遠い異国の地で食べた野草や、狩りの仕方や、見知らぬ土地の言葉を、たびたび話して聞かせていた。そのおかげで私は、あの男自身に比べたら、まだ楽に旅をしたのではないかな。言葉の通じぬところから、背格好も肌の色も違う人間の間に飛び込んで、自分は敵ではないのだと訴えるという、ただそれだけのことが、どれほど難しいものか、お前に想像ができるだろうか。戦の絶えない土地ならば、なおさらのことだ。ふん、考えてみれば、アシエリは半ば、予想していたのかもしれないな。私がいつか、故郷を飛び出すのではないかということをも。

それで、とこしえの黄昏の地はどうなったのかって？ そうだね、その話をしていたのだった。ああ、そうせかすもんじゃないよ。若い者は気が短くていけない。

結論からいえば、その国はたしかにあったのさ。遠く北の涯の、そうだね、ここからだとな人の足ならば、月が二十も満ち欠けするほど延々と歩かなければ、辿りつかないような場所だ。歩くだけでは無理だね。船も使う。四ツ脚鳥の背中にのって山越えもする。十人が通って、九人は命を落とすような、そんな険しい道もある。人が誰も通らない獣道も通る。大きな獣も襲い掛かってくる。いったいそんな涯の地に、どうやって人が住み着くようになったのだろうね。だが私は幸運にもその道を越え、そこにはたしかに人が暮らしていたのだ。

アシエリから聴いた話では、その国に棲んでいるのは、人ならぬ精霊や妖精、古代の生き物たちではないかということだったのだが、

実際に行ってみればなんていうことはない、そこに暮らしているのも、当たり前の人と獣たちだった。

私は北の涯という場所は、もっと寒いものかと思っていた。いや、たしかに信じられないほど寒くはあるのだが、かつて越えたシジ・シャガラ山の山頂付近に比べれば、凍えるほどではなかったな。その証拠に、あの山の上のほうには樹の一本も生えていないが、涯の地には、針のように細い葉をたくさんつけた、背の高い樹々が、うっそうと繁っていた。

畑もあった。四足の、ほかでは見たことのない毛深い動物がいて、人々はそれを飼い、乳もとっていた。海にはときに氷が流れてきたし、雪も降ったけれど、そこは少なくとも、人が生きていけないような場所ではなかった。

とこしえの黄昏の国という、その呼び名のとおり、その地には昼も夜もなかった。日がな一日、太陽は地平線すれすれを掠めるように、横に滑ってぐると周りを回るのさ。月だってそうだ。地上に半分だけ顔を出して、ぐるぐると回っている。欠けながらゆっくりと太陽に近づいて、やがて離れていくから、そのときどきで、うっすらと見えたり、見えなかったりする。

その国の東南には、低い山脈がつらなっていたから、太陽がそのあたりを通るときだけ、ほんの少し、あたりが暗くなる。あとは天気の崩れたときにも、やっぱり暗くなるね。だが、それだけだ。太陽が天高く上って日差しが肌を焼くこともない。日が沈みきって空に星が瞬くこともない。いくつかの明るい星だけが、太陽のあるほうと反対側の空に、いつもちらついていた。

日差しが弱いせいか、人々の肌は抜けるように白かった。そして、彼らは夜に休むということを知らないから、いつときまどろんでは起きて、働き、起きている間が合った者と語らい、疲れればおのの好きな時間に眠るといったぐあいだった。その必要があるときには、時間を決めて、交代で眠る。それで体に堪えないのかと思うが、その土地で長く暮らしてきた人たちだからね、すっかりそう

いう体の作りになってしまっているのだろうさ。実際、私もそこですごく過ごすうちに、世界に昼夜というものがあることを、忘れてしまいそうになった。

その国の人々は皆、ゆったりとした口調で話をした。さすがのアシェリも、その言葉までは知らなかったようで、私は一から十まで身振り手振りで、彼らに意思を伝えなくてはならなかった。その手振りさえ、故郷では感謝を意味する手の振り方が、彼らにとってはまるきり違う意味の合図になってしまいうだった。そりゃ、はじめは苦労したさ。それでも、さすがは日の沈まない国というべきかな、皆、どこかおっとりとした人たちだね。ともかく私に敵意のないことだけでも伝わると、あとは誰も彼もが、根気強く相手をしてくれた。

不思議なもので、言葉や仕草はまるきり違っていても、笑ったり怒ったりする表情は、さほど変わらないものだ。何か月かをそこで過ごすうちに、私は少しずつ、彼らの言葉を覚えていった。彼らの畑の世話の仕方も教えてもらった。あの国では、作物が育つのが遅い。だから皆、念入りに畑を見回り、せっせと世話をやいた。お前は知っているだろうか。お前や私がさつき食べたノイオ麦の飯、あれは、植えてひと月で実るだろう。あれだけ短い期間で育って、保存もきき、あれほど滋養のある作物は、とても珍しいものなのだよ。おかげでこの土地に住み始めてから、ひもじい思いをしたためしがない。ノイオ麦は、このあたりよりほんのちよつとでも北に行けば、寒すぎて育たないし、わずかでも南に行けば、今度は暑すぎて実がつく前に枯れてしまう。この土地はとても恵まれているのだよ。それだからこそ、過去には戦も多かったのだろうがね。私の故郷なんぞは、貧しい場所だからね、誰も争ってまで奪おうなんて思いやしない。

涯の国では、彼らの漁にも混ぜてもらった。北の海は寒かった。間違えて落ちたら、あっという間に手足が痺れてまともに泳げず、下手をするとすぐに心臓が止まってしまいうほどだ。それだから、船

はとても頑丈なつくりだったし、彼らの船の扱いは目を疑うほど巧みだったね。この辺りの海の男の比じゃない。ああ、別にお前の仕事を馬鹿にしているわけではないよ。お前は立派な漁夫だ。本当にそう思っているよ。さっきの魚も旨かった。

ともかくその国で、私は一人の男と出会った。

その男、フィリオルの瞳は、よく澄んだ明け方の空のような、ごく淡い青をしていた。その髪は、よく晴れた日の夕陽が、雲をやわらかく照らすときの、あの空の色と同じ、黄金の色をしていた。おや、信じないのかい。だがあの国には、金や銀の髪の人々が、緑や水色や灰色の瞳の人々が、たくさんいたのだよ。私はこの目で見てきた。ミシエゴの商人の中に、たまに目の色がやたらと明るいのがいるだろう。あれがもつと極端になるだけだ。何がおかしなことがある。

世界には、背丈も、髪や目や肌の色も、食べ物も言葉もまるきり違う人々が、それぞれに暮らしているのだよ。多くの人が、それを知らずにいるだけなのだ。

フィリオルは、いつもどこか夢見るような目つきをしていた。背が高く、そうだな、私よりも頭二つは大きかった。睫毛まで髪と同じ、日に透かしたような金色をしていた。

ところでこの辺りでは、男は好いた女たちの家に、数日おきに通うだろう。女は、産んだ子どもを自分の家で育てるし、男たちはその子どもらにも会いに通ってくる。女だって、別々の男の子を孕むのだって、珍しいことでもない。私の故郷でもそうだった。いま、何を当たり前のことをいつているのかと、そういう顔をしているね？　それが当たり前でないと聞いたなら、お前はと思うかね。

あの国では、違っていたのだよ。といっても、女が男のところに通うのではない。互いにたった一人の相手を伴侶と定めて、生涯連れそうのだ。

実感が湧かないか。そうだろうね。

私はフィリオルと恋仲になった。ふ、そう変な顔をするのはおよしよ。私にだって娘時代はあったさ。

いつときの間、私たちはそこで一緒に暮らした。さあ、どれほどの期間だったのだろうか。あの場所では、時が流れないのだ。いや、ほんとうに流れないわけではないのだがね、日も沈まないばかりでなくて、星の動きもよくわからないから、時の流れを誰も気にしていないようだった。いまにして思えば、月の満ち欠けするのを、しっかり数えていればよかったのだろうがね。

あの国では、伴侶はいつも同じ家で寝起きする。畑に出たり、漁にいったりしている間は、別々に過ごすこともあるが、帰ってくる家はいつも同じだ。樹を切って、四角く削った石を組み合わせてつくる、頑丈な家だ。床には毛皮を敷き詰める。外は寒いが、その家の中は驚くほど温かい。薪を伐ってきて、いつも絶やさず火を焚いている。

そこでの暮らしは、このあたりに比べたら、厳しくはあった。作物が育つのがゆっくりだから、たまたま何かあって、そのときに作っていた畑が全滅すると、とたんに喰うものに困る。そうになると、毎日魚と乳とわずかな草の実ばかりで過ごすようになる。寒いのとひもじいのが重なれば、人は弱る。

だがそんなときは稀で、大抵はなんとか凌ぐことができた。それというのも、魚がよく獲れたのだ。その点だけは、ここいらよりもよほど豊かだったといっている。

だから、黄昏の国での暮らしに、不満があったわけではなかった。だが、私はいまここにいる。何故だか、お前にはわかるだろうか。フィリオルが、外の世界を見たいといい出したのだよ。

惹かれあうからには、それだけの理由があるのだろうね。お前の見てきた世界を、昼と夜のある世界を、俺もこの目で見てみたいのだと、あの人はいった。遠く温かい土地を、険しい山並みを、まるで相の異なる草木や獣や鳥たちを、違う言葉と違う習慣のもとに生きる人々を。世界のありようを、この目で見てみたいのだと、フィオルはいったのだ。

私はためらいはしたが、長くは迷わなかった。

やはり私は、薄情な女なのだろう。よくしてくれた舅や姑を、あの人の兄弟たちを、生まれ育った北の大地を、あの人に捨てさせたのだから。

二人の旅は、困難なことには変わりなかったが、いま思い返しても、とても幸福なものだった。昼と夜の過ごし方を、高山での暖のとり方を、嵐のしのぎ方を、平らな土地での方角の見出し方を、行きの道々で覚えた草木の名前や、鳥や獣の狩り方を、料理や細工や、その土地の精霊への祈り方を、人々の言葉や習慣を、知っている限り、私はあの人に話して聞かせた。逆に、かの地へ向かう道で私が気づかないままでいたことに、あの人が目を留めて、私に知らせてくれたりもした。人は一人では、己のものの見方しかできないものなのだということが、あの頃、つくづく身に沁みた。

何度となく危ない目にもあった。悲しい思いもした。人にだまされたこともあった。虎だの人食い魚だのに襲われたこともあったし、大小の怪我もした。だが、あの人が新しい世界を見つめるとき、空色の瞳には、いつも眩しいような光があった。

アシエリが見たかったものを、彼がいまこの目で見ているのだと、そう思った。

ふ、それがどうしたという顔をしているね。

お前がさっき、持ち帰ってきた銅貨があっただろう。あのお顔が、どなたのものか、お前は知っているかね。そう、三代前の王様だ。

その銅貨が、通用しない土地があることを、お前は考えてみたことがあるかね。

この国に、いくつの都と町があるか、知っているか。このミッテイス、隣のフロウ、その先にあるバーディエラ、北のフォン、ベラウ、シアティ……。もう出てこないか。もうちょつとあるね。私の記憶は少し古いかもしれないが、三つの都と、二十あまりの村と町、それをあわせたものが、この国だ。この王様の銅貨は、そこでしか使えないのだよ。

それじゃあ、この国の外にいくつの国があって、そこにどれほどの町や村があるか、お前は知ろうとしたことがあるだろうかね。ああ、私だって、正しい答えを知っているわけじゃない。

とこしえの黄昏の国を発って、この町に至るまでに、あの人とふたりで通ってきたのは、あわせて七つの国の六つの都と、二十の町と、四十いくつだかの集落だった。

それはこの広い大地の上にある、あまたの国の、そのほんの一部だ。私だって、この大地の隅々までを旅したわけではないのだよ。故郷の地と、とこしえの黄昏の国と、この町との間の、ほんの一部の土地を巡っただけなのだ。それだけの旅路でも、その土地のそれぞれで、いったい何種類の銅貨と銀貨があって、いくつの言葉があって、何十柱の土地神と精霊が、何百の祠と神殿に祀られているのを見たと思うかね。海辺の港町と、山奥の小さな村と、人のおおぜい集まる都とで、どれほどに暮らしが違うか、食べるものが違うか、祖先の祀りかたが違うか、この町を出たことのないお前に、想像ができるだろうか。

それだけの道のりを経て、この土地のすぐ近くまで、私たちはやってきたのだよ。ただ生きて通ることさえ困難な道も、いくらもあったというのに。

あの人が倒れたのは、もう一日も歩けば、この町にたどりつこうかという辺りだった。

ジャハラ熱だ。お前もかかったことがあるね。地元の子どもらな

らば、一晩も熱を出せばけろつと治って、二度とかからないような、たわいのない病だ。

お前は知っているかね。土地の人にはたいした障りもないようなささやかな病が、違う土地に運ばれたとたん、次々に人の命を奪うこともあるのだよ。

微熱があるといい出してから、二日ともたなかった。薬の備えもね、なかったわけではないのだよ。だが熱さましも、ろくに効かなかった。あの国の人々の体と、私たちの体と、何がそれほど違っているというのだろうか。無学者にはわからないが、いまでもひとつだけ、はっきりとわかっていることがある。私はあの男を、生まれた土地から連れ出すべきではなかったのだ。

あとでわかったのだが、私はそのとき、孕んでいた。

フィリオルの亡骸を辻に埋めたあと、そんなことにも気がつかないまま、私はこの町まで歩いた。歩いたのだと思う。その次に覚えているのは、産声をあげるお前を、呆然と抱きかかえているところだ。初めて顔を見るような産婆が、私の肩を叩いて労ってくれていた。知らない女たちが、お前と私を囲んで、安心したように、あるいは私を安心させるように、笑っていた。なるほど、地の涯ほどの遠い国でも、人々の笑顔は、それほど違わないものだ、あらためてそう思ったのを、よく覚えている。

どうやってこの町の人々に、自分の身の上を説明し、住む場所を貸してもらったのか、どうやって産婆を呼んでもらったのか、それまでの記憶は、まるで思い出せない。

ほら、およしよ。男がそんな情けない顔をするものではないと、いったらう。

だがまあ、この歳になるまで生い立ちを話さなかったことで、お前も、つらい思いをすることもあっただろう。近所の子どもらが、お前のその明るい色の瞳に、栗色の髪に、ひどい言葉を投げかける

ところを、何度も見かけたよ。大人が口出しをすれば、お前はかえって嫌がると思ったから、何もいわなかったけれど。

なぜこれまで、お前の生い立ちを話さなかったのかは、もう、うすうす察しがついているだろうか。私は自分が子どもだったころ、アシエリの話信じたことで、周りの子らに嘘つき娘だと、端から決め付けられていたのだ。そうでなければ、狂人の子だと哀れまれていた。私はお前に、同じ思いをさせたくはなかった。

私は誰に身の上を聞かれても、故郷の町が、さもこの町からほんのちょっと離れたところだというふうにふるまっていただろう。同じよそのものでも、似たような習俗を持つ近くの土地の人間であるほうが、まだ人々の風当たりは少ないと、身を持って知っていたからだ。本当はそれどころではない。ここから東に山を三つ越え、河を渡り、さらに南に下って森を抜け、あわせてふた月ほども歩かねばならないところに、私の故郷はある。お前の祖父母が生まれ育った土地だ。

そうした話を、もっと早くに聞かせてやればよかったのだろうか。と、いま時分になって思うようになった。お前は昔から、自分の父親の話を聞きたそうにしていたが、一度も聞いてはこなかったな。遠慮していたのかい。

お前は、私が何度か男たちの求愛を断ったことを、不思議に思っていたようだったが、それでも訳を訊いてはこなかった。これでわかっただろうか。

私の男、私の夫。互いにたった一人と思い決めて、生涯連れそふ伴侶が、私には既にいたのだよ。

納得がいかないという顔をしているね。それならばそれでかまわない。人は自分の信じられるものしか信じないものだ。

地の涯にはとこしえの黄昏の国があつて、そこでは昼も夜もなく、金銀の髪と色とりどりの淡い目をした人が、時の流れるのも知らず暮らしている。そんな荒唐無稽な話は、信じなくとも生きていける。生きてはいけるのだ。

灼熱の海に向かう

なあ、ヴィトラカよ。俺はいつだったか、海の話を書かせたことがあったな。そうだ、どこまでもひたすらに水が満々と湛えられて、その岸边には、いつも波が打ち寄せている。なに、嘘だといわれたって？ その辺のガキどもにか。ったく、あいつらときたら、自分の足で町の外を歩いたこともないくせに、簡単に人の話を法螺だと決め付けやがる。まあ、あいつらの親がそういう態度なんだから、子どもはそりゃあ、真似するさな。

なあ、真面目に聞けよ。ここから南西にずっと行くと、そこには本当に、海があるんだ。

はるか南西には、砂漠がある。足元には硬い大地がなく、見渡す限りが熱い砂に覆われている。そこを越えてさらにずっといけば、どれほどしっかりと工夫を凝らしたところで、とても人の踏み入れないほどの熱さになる。地面の上だって焼けて、とてもじゃないが、昼間に近寄れたもんじゃない。夜の、日が落ちてだいぶ経ったころなら、かろうじて足を伸ばせるっていうところだ。それも、もたもたしていて、日が昇ってしまえば、あつという間に干からびて死んでしまうだろう。

その砂漠を越えてゆくと、その先には海がある。水はぐらぐらと沸きかえって、夜でももうもうと蒸気が立ち込めている。海の上はろくすっぽ見とおせない。しかもその上、あたりは轟々と風が吹きすさんでいる。ああ、その先までは、さすがに俺も見ただけではない。見たやつは誰もいないだろうさ。その前に、茹で上がって死んでしまうからな。

あるいはひたすら北西へと向かうと、そちらには人の住める、冷たい海がある。そこでは、海辺にもたくさん村があって、海の中には、川に棲んでいるのとはまた違う魚や、貝がいる。そこで人々は、漁をして暮らしている。海の上に住んでいるやつらもいる。こ

う、木材を組んでな、海の上に張り出した家を作るんだ。たまに嵐がきて、壊される。そしたら風が静まるまで、どっか陸の洞窟なんかでしのいで、嵐が静まったら、また一から家を作るんだ。その家の窓から釣り糸を垂れて、獲れた魚を捌いて喰う。暑くなったら、そのまま海に飛び込んで泳ぐ。いい暮らしだよな。

まるきり船の上で暮らしているという連中も、どこかの海にはいるんだそう。船というものに、俺は何度か乗ったことがあるが、あれはな、天気が悪くなると、揺れる。ため池に浮かんだ木の葉も、風が吹いたら揺れるだろう。ああいうもんだ。よくそんなものに、何年も乗り続けていようと思えるもんだよな。しかし、船暮らしの連中は、天気を読む不思議なわざを身につけているんだそう。風が吹き荒れそうになったら、早くからそれと察してな、こう、先回りしてよけるらしい。

嘘をついて、お前なあ。まあ、信じないならそれでいいけどな、その口調はいただけねえ。

なあ、ヴィトラカよ。お前もそろそろ少しは、娘らしくしてはどうか。お前、そんな調子では、通ってきてくれる男もおらんだろう。はは、ろくすっぽ顔も出さなくせに、父親面するなってか。そりゃあそうだ。

海に向こうには、何があるのかって？

西の涯の海、その向こうに、何があるのか、俺にはわからん。海辺の連中に聞くと、何もないという。少なくとも、船でいける限りのところには、陸地は見当たらんのだそう。信じられないような顔をしているな。広いつていつたって、たかが水溜りじゃないかって、思うんだろう。俺もそう思ったさ。だがな、ヴィトラカ、信じられるか。この世界ではな、陸地よりも、水に沈んでいる場所のほうが、ずっと多いんだそう。

もっとも、そういつている連中も、海辺に住んでいて、内陸のこ

とはその目では見て知らないわけだからな。俺らが世界の涯まで陸地が続いていると思っっているように、自分たちが信じていることを、そのまま語り継いでいるだけなんだろうさ。さて、どっちが本当なんだろうかな。

なに？ 南の海の、その先には、何があるかって？

くくっ、お前ってやつは、つくづく俺の娘なんだなあ。一面に煮えたぎって真っ白に曇り、魚の一匹も棲めない、そんな場所の先に、何かがあると、お前は思うのか。

怒るな。笑ったからっていつて、馬鹿にしてるわけじゃねえよ。

西の海には、涯がないように見える。じゃあ、南はどうなんだろうな。煮えたぎる熱湯の海の、向こう側は。やっぱり何も、ないんだろうか。

ヴィトラカよ。この地面の下、ずっとずっと掘り進んでいったら、そこに何があるか、お前は知っているか。

まあ聞け。お前の聞きたいことに、この話はちゃんとつながっているから。

地面の下を、森に積もる枯葉の下を、どこまでも掘っていつても、そこにずっとやわらかい土が詰まっていると、お前はそんなふう to 思っではないか。

この地面をずっと、ずっと掘っていくとな、やがてどこかで、固い岩にぶつかるとだ。深さに違いはあるが、どの土地でもそれは同じなんだそうさ。俺たちが土を耕し、そのうえに作物を作るのは、大地の上の、ほんの薄皮一枚の話なんだな。

お前は固い岩に、穴をあけることができるか。そう、無理な話だ。だが、それをやってのける連中も、この広い世界には、ちゃんという。ああ、これも話したことがあったか。そう、土人と呼ばれる連中だ。やつらは鶴嘴と火薬をうまく使って、固い岩の中にも、なんということなく穴をあけてしまう。

その連中が、地面の底の深いところに掘った、秘された道があるという。噂だ。この目でみたわけじゃない。実際に通ったってやつを、じかに聞いたこともない。ただ旅先で、そんな話を耳に挟んだっただけだ。

ともかく、その地面の下道は、海の底よりもずっと深いところまで、延々と深く下っていくんだそう。……おい、近場で試すんじゃないぞ。ため池の下をぐるぐる道なんぞ、ガキの力で作れるもんか。

その海の底の道っていうのは、どんなところなんだろうなあ。地面の下だからな。少なくとも、日の光は届かない。さぞ、真っ暗な道なんだろうな。ずっと日が当たらないんだろうから、寒いのか、それとも、蒸し暑いんだろうかな。

ともかく、噂によると、その道をひたすら歩き続けると、やがて「向こう側」に抜けるんだそう。

向こう側がどんなところなのかって？ 俺は知らないな。ただ、そうだな、ここから南に行けば行くほど、基本的には暑くなる。それでもどんどん先に行けば、やがては煮えたぎる海がある。だからその向こうは、石も鉄もどろどろに溶けるような、炎の渦巻く世界だと、そんなふうに考えるのが、普通なんだろう。なあ、お前はと思う？

そんなところに暮らすものがあるとすれば、それは神々か、精霊か、それとも死者か。

それともあんがい、そこにも、当たり前の人間が住んでいたりしてな。

ふ。そうだったら面白いっていう話だよ。あんまり真に受けるな。

なんでそんなに、世界中を見て回らなきゃならないのかって？
さてな。考えたこともない。

血、かもしれねえな。俺の親父は、風の一族だったというから。

聞いたことがないか。そうだよな。ここらの連中は、そういうやつらがいることさえ、知らないものな。

風の一族っていうのは、流浪の民だ。流浪って、わかるか。俺みたいにくらふらして、一つところに住まない人間のことだ。

いや、ミシエゴの民とは違う。あいつらは、定期的に同じ道を往復するだけだろう。まあ、俺の親父は、あいつらの隊商に混じっていたそうだから、あながち間違いでもないんだが。

なんでそういう暮らしをする必要があるんだろうな。同じところで、おとなしく暮らしてりゃ、それでいいじゃないかって、そう思うよな。山が崩れて住めなくなったとか、土地が枯れて作物が育たなくなったとかいうならわかる。だが、そこに食い物があって、水があって、寒さをしのげる場所があるのなら、わざわざ放浪する必要が、どこにある。そう思うだろう。

俺だってそう思うよ。だけどな、風が呼ぶんだ。

風はしゃべらないってか。くくっ。まったく、可愛げのないガキだ。

なあ、ヴィトラカよ。お前、次に俺が来るときまでに、少しは女らしくなってるよ。そんなつつけんどんな物言いばかりしてねえでよ。そんなんじゃ、お前、男どもも近寄ってこないだろうが。

男なんかいらないうってか。馬鹿たれ、男と女ってのはな、いいものだぞ。

ろくに顔も出さないお前がいうなって？ ふ。まだまだガキだな。俺がどれだけ、お前の母親に惚れてるか、見てわからないんだからな。

まあいい。

さあ、もういいかげん、ガキは眠る時間だ。明日は俺は早くに発つからな。見送りはいらねえよ。ゆっくり寝てるといい。

ああ、今度は、ずっと北のほうに行ってくるつもりだ。土産話を

楽しみにしているよ。……ふ、そういいながら、ほんとうは、聞きたいんだろうが。お前、なんだかんだいって、目が輝いてるもんな。まったく、俺の娘だよ。

ああ、北だ。お前にはたしか、話したことがあっただろう。ずっと北のほうには、一日じゅう陽が沈まない国があるらしい。よく覚えてるな。そうだ、とこしえの黄昏の国だ。さあな、寒いところらしいとは、聞いたが。国っていったって、そんなところにいたい、誰が住んでいるというんだろうな。精霊か、妖精か。それとも本当に、死者の国かもしれないねえな。くくつ。

嘘だと思うか。まあ、それでもいいさ。もし嘘じゃなくて、この目で見ることができたなら、また話して聞かせてやるよ。次に帰ってきたときに、な。

それまで、達者でな。ああ、おやすみ。

夜明けを告げる風

ちょうどいまごろが、一年でもっとも星明かりの眩しい時節だ。
ヨブはめざす南西の空を見上げて目を細めた。

満天の星空の中、下弦の月が天頂をすぎて、ゆっくりと沈みゆくとしていている。西寄りの低い空、ふたつ並んで青白い光を放っているのはタ・デイハル《七の導きの星》。その位置を頭の中で暦と照らし合わせて、ヨブは夜明けまでの時間を数えた。今夜は少し、急いだほうがいいかもしれない。

ヨブが歩調を早めると、忠実な驢馬は何の不満もみせずに従ったが、人間の連れのほうは、そうはいかなかった。

「急ぐのか」

ひびわれ、枯れた声だった。慣れないせいで砂を吸い込んでしまうのだろう、歩きながら、ときおり不器用に咳き込んでいる。

「日干しになりたくなければな」

ヨブが素っ気なく答えると、連れの男は苦笑をひとつ漏らして、急ぎ足になった。砂を踏む音に、疲労がにじんでいる。

見れば、男は歩きながら震えていた。外套を羽織りなおして、男は白い息を吐いた。「寒いな」

ヨブは肩をすくめた。これくらいは寒いうちに入らない。

「これほど寒いというのに、ひとたび陽が昇れば灼熱の地になるとはな。この目で見ても信じられない」

そう呟いて、男は目をしばたいた。

何を当たり前のことを、といいかけて、ヨブは言葉を発する前に気がついた。砂漠の外は、そうではないのだろう。

男は砂漠の涯^{はて}よりさらに遠く、はるか北の土地からやってきたのだという。砂漠に外というものがあることを、ヨブは知識として知ってはいるが、そのことが身に迫って感じられたためしはない。そ

れほどヨブの知る砂漠は広大だった。不毛の海をのぞむ、南西の断崖を別にすれば。

「お前の郷では、夜は冷えないのか」

退屈しのぎのつもりでそう訊くと、男は真面目な顔でうなずいた。「もちろん、昼間に比べれば少しは冷える。だが、これほどではない」

それから男は目を細めて、故郷の話をした。男の生まれた町は、山の中腹にあるのだという。怪訝な顔をしたヨブに気づいて、男が補足したところによると、山というのは、巨大な砂丘のようなものだった。ただし砂ではなく、湿った土と岩とで出来ており、その斜面には数え切れないほどの草木が繁っているという。人々は石と煉瓦ではなく、伐り倒した木で家を作る。

その話の何から何までが、ヨブには眉唾もののように思えた。このあたりでは、雨は二月か三月に一度も降ればいいほうだし、木と云うものが、建物の材になるほど太く育つというのが、まず信じられない。

だが口を挟みはせずに、ヨブは黙って男の語る風景に耳を傾けた。男がひどく楽しげに、それを語ったからだ。痩せた麦から丁寧に実を外す、年寄りたちの皺ぶかい手。高くそびえる樹々の、梢に繁るあまたの葉。その隙間から漏れる陽射し。その枝に、月が満ちるごとに実る酸い果実。競うように樹に登ってそれをもぐ子どもらの、泥に汚れた足の裏。

そうした話を聴きながら、ヨブはオアシスで待つ息子たちのことを思った。この話を聞かせたならば、まだ幼い息子らは、どのような顔をするだろうか。

彼から濃灰色の瞳を受け継いだ、三人の息子たち。それぞれの顔を思い浮かべて、ヨブは驢馬の背を撫でた。それから小さく首を振った。彼らに再会できる日は、ずっと先のことだ。道行きは長い。

いかにも異国の風貌をしたこの男が、ヨブの部族が暮らすオアシス、ファナ・イビタルを訪れたのは、三日前、イデイスの月の七日の出来事だった。

それは部族にとって重要な聖祭日、一年の降雨を祈願する祭りの日だった。この日にオアシスを訪れるものは、鳥であれ獣であれ、大変に縁起がいいとされ、古来、殺生を固く禁じられている。

くたびれた外套をまとった男は、隊商からはぐれたのか、あるいは驢馬を失ったのか、たったひとりでわずかばかりの荷を背負って、よろよろと歩いてきた。それでも水と食べ物を与えられて顔色に戻すなり、驚くほど必死に人々の間を乞うて回った。砂漠の涯にあるという灼熱の海へと、誰か、案内してはもらえないだろうか。

オアシスは騒然となった。その海岸そのものは、何も特別な禁忌の地というわけではない。だがそこは、部族の聖域にほど近かった。よそのものが訪れたいといって、けして歓迎される場所ではない。男がやってきたのがその日でさえなければ、物騒な話になっていてもおかしくはなかった。

しかし男はほかでもないその祭日にオアシスを訪れたのだし、その上、真摯に彼らの助力を乞うたのだった。どこで身につけてきたものか、それはたどたどしいながらも砂漠の部族であればどこでも通用する、正式な作法にのっとった請願だった。また、男はその無理な願いにふさわしいだけの報酬を積んだ。

古来より交易で身を立ててきたファナ・イビタルの男たちは、砂漠の案内人として名高い。その知恵を頼んでやってくる者は珍しくもないが、それにしてもこのような妙な出来事は、そうあるものではない。

だが、ヨブの知っている限りでは、かつて一度だけ、似たような来訪者があった。その男もやはりイデイスの聖祭日にオアシスを訪れ、灼熱の海への案内を乞うた。もう十年も前のことになる。

そのときの男を案内したのが、ヨブだった。十年を経て、奇妙な類似を思わせる二人目の男がやってきたことを知ったとき、ヨブは

喧騒に満ちた広場の隅で、眩暈を覚えて立ちすくんだ。

その晩、長が呼んでいると遣いの男が告げたとき、ヨブはその呼び出しが来ることを、なかば予期していた。できることならばその予感が外れてほしいと願いながら。だが夜更けになって、遣いはやってきた。不安げな顔をする末の息子の肩を叩いて、ヨブは急ぎ足に長の邸へと向かった。

――入るがいい。

声にしたがって垂れ絹をくぐると、銀糸で施されたきらびやかな刺繍が、視界の端に尾を引いた。

常にそうであるように、部屋の間には二人の番兵が控えていた。

ヨブは視線を伏せたまま、部屋の半ばまで進み出た。奥にしつらえられた椅子の主を、直視することが耐えがたかった。ヨブは頭を垂れたまま、長の言葉を待った。

――奇妙なものだ。

長は重々しくいって、言葉を切った。それから、ヨブが身じろぎひとつしないのを確かめるように、じっと見下ろす気配があった。

長すぎる沈黙のあとに、長は言葉を続けた。

――あのような不毛の海へと、案内を請う男があらわれるとは。それも二人目だ。

ヨブは相槌をはさまなかった。うなずきもしなかった。ただ伏せた顔の下で、床を凝視していた。敷き詰められた数え切れない日干し煉瓦、そのひとつひとつに職人の手によって彫られた、精緻な彫刻を。

表に出すことを許されない反発の、それが精一杯のあらわれだった。だが、長がそうしたヨブの感情に気づいているとは、とうてい思えなかった。長がおもむろに椅子から立ちあがる音が、ヨブの耳に届いた。

――ヨブ・イ・ヤシャル。お前ならば、今度もまた、立派につとめを果たしてくれるだろう。

それはすでに定められたことがらを語る声だった。

たとえ脇に控える番兵がおらずとも、逆らうことなどできるはずがなかった。無言のまま顔を上げると、長の掛けていた椅子、その肘置きに施された装飾が、まっさきにヨブの目に飛び込んだ。それは床の彫刻と同じ短刀の意匠で、部族の威をあらわすものだ。

長はじつとヨブを見下ろして、皺ぶかい顔に微笑を浮かべていた。それはいかにも、部族の優秀な若者に期待をかけているというような表情に見えた。ただその中で、濃灰色の眼だけが、ひどく温度の低い光を宿していた。

――亡き父の、名誉にかけて。

ヨブは低く答えて、長の顔を見つめたが、その表情には、欠片ほどの変化も見られなかった。立ち上がり、ヨブは一礼して踵を返した。

日取りを考えれば、翌日の晩には発たねばならなかった。すぐに退出しようとしたヨブの背中を、低い声が追いかけてきた。

――わかってるな。

振り返ると、長はもう微笑を浮かべてはいなかった。ヨブはうなずき、振り返らずに部屋を出た。背中にいやな汗をかいていた。悪夢にうなされたあとのように。

次の夜には、ヨブは旅支度をすませて、驢馬の一頭を借り受けた。そうして会ったばかりの男と二人、はるかな旅路についた。

十年前に涯の海へ導いた旅人と、いまヨブの隣を歩く男の顔立ちは、どこか似通っているように、ヨブの目には映った。異国の者はたいてい似たり寄ったりの顔に見えるものだが、もしかするとそればかりではなく、出身が近いのかもしれないかった。

「お前、名はなんというのだったか」

いまさらのようにヨブが問うと、男は困惑したふうに目を瞬いた。「悪い。すっかり名乗ったつもりになっていた」

「いいや。皆の前で名乗るのを聞いていたが、覚え切れなかった。」

音が、耳になじみがないから」

ヨブがそういうと、男はああ、とうなずいて、気を悪くしたようすもなく名乗りなおした。

「俺の名はアシェリという。故郷では、風を意味する言葉だ」

アシェリ。口の中で二度呟いて、ヨブはうなずいた。

「今度は覚えた」

それを聞いた男は、齒を見せて人懐こく笑った。

「あんたのヨブという名には、どういう意味があるんだ」

ヨブは面覆いの下で、わずかに顔をしかめた。それに気づいたのか、アシェリは困惑したふうに首をかしげた。

「俺は何か、失礼なことを訊いただろうか」

「いや。ヨブというのは、鳥の名前だ」

「へえ。気に入っていないのか」

「そうではないが。どうせなら父も、もう少し遅しそうな名をつけてくれればよかったのには思う」

ははあ、とうなずいて、アシェリは笑った。「なるほど、たしかにあんたには、もっと強そうな名前が似合うかもしれないな」

肩をすくめながら、ヨブは奇妙な既視感を覚えていた。十年前の道行きで、似たような会話を交わしたのだった。

あのときの男はイーハと名乗り、アシェリがそうしたように、続けてその名の意味するところを説明したのだった。それは男の育った土地の言葉で、夜明けを意味する名だということだった。

いわれてみれば、男の眼は、黎明の空を思わせるような紺青色をしていた。しかしヨブがそういうと、イーハは怪訝そうに首をかしげた。そうだろうか。そのようにいわれたことはなかったが。

やがて旅の途中、明けゆく東の空を見て、イーハはようやく腑に落ちたようにいった。なるほど、砂漠の夜明けとはこうしたものなのか。長年さまざまな地を旅してきたが、このような空を、初めてこの目に見た。俺の父親の生まれは砂漠地帯のどこかだと聞いていた。お前のいうように、この空を思って、俺にこの名をつけたのか

もしれないな。

ほかでは言葉少なだった男が、ゆいいつ自ら長く語ったのが、その話だった。男はいかにも異国の者らしい風貌をしていたが、それでも黒い髪と浅黒い肌とを持っており、砂漠の民族の血を引いているといわれれば、うなずけないことはなかった。

十年前のあのとき、あの異国の男を連れて歩いた旅路で、ほかにもどのような話をしたのだったか。ヨブは口をつぐんで、遠い記憶を探った。静かなまなざしをした男だったのが、印象に残っている。寡黙で、ぽつりぽつりと切れ切れに言葉を落とした。

アシェリはしばらくのあいだ、ヨブの沈黙につきあっていたが、ふと思い立ったように、慣れない手つきで驢馬の背を撫でた。

「それにしても、こいつは変わった馬だなあ。前に通った町でも、何度か似たようなのをみかけたが、砂漠の馬は、みなこのような姿をしているのか」

ヨブは振り返って、思わずアシェリの顔をまじまじと見上げた。表情を見る限りは、どうやら真面目にいつているらしかった。

「お前、驢馬を知らないのか」

「へえ。これは驢馬というのか。なかなか愛嬌のある顔をしている。こいつの名前は、なんというんだ」

「驢馬に名前などつけるものか。……お前、驢馬もしらずに、どうやってファナ・イビタルまでたどりついたというのだ」

思わず強い剣幕で問いただすと、アシェリは肩をすくめた。

「金がなかったのだ。あんたたちへの謝礼をかき集めるだけで、精一杯だった。あんたたちの町へ向かう星のたどり方は、ひとつ手前のオアシスで、地元の少年に教わったのだが」

それでも最後の一日は水も食糧も尽きて、あやうくのたれ死ぬかと思った。アシェリはあっけらかんとそういった。

「それにしても、あの少年は、やけに熱心に道を教えてくれるものだったか、あれはもしかすると、俺の無謀さに同情してくれたのだったかな」

「そうだろうな」

ヨブが呆れてうなずくと、アシェリは照れ隠しのように笑って頭を掻いた。

「それにしても、あんたたちの星の読み方は、信じられないほど詳しいなあ。俺もどうにか、いくつかは覚えたのだが」

アシェリはそういつて、進行方向の低い空にある、ひときわ眩しい星を指した。「あの白い大きな星が縦に並んでいるのが、イオ・イデイス《賢人の杖》。南西にある二連のものがタ・ディハル……」
つられて遠景に目を投げたヨブは、遠くの地平に町の明かりを見いだした。

「ああ、見えてきたな」

夜明けにはまだいつとき時間がある。間に合ったことに安堵しながらそういつと、アシェリは訝しげな表情になった。

「どこだ」

「そら、あそこに灯があるだろう」

指さしてみせても、アシェリは首をひねるばかりだった。

「ちっともわからない。砂漠の人間は目がいいと、噂には聞いていたが、ほんとうなのだなあ」

感心するようにいつて、アシェリは笑った。

それにしても、よく笑う男だった。これほど頻繁に表情を変える男を、ヨブはほかに知らない。女子どもならいざしらず、立派な男は、おいそれと感情を顔に出すものではないからだ。

だがアシェリは、そうしたことを、ちっとも恥とは思っていないように見えた。そのことに毒気を抜かれるような思いをしながら、ヨブは驢馬の手綱を引いて足を速めた。

オアシスに辿りついた二人は、安宿をたずねて大部屋の一角を借り、水の値についてそれなりに満足のいく交渉をすませた。前払いの代金を銅貨で支払ったヨブが、驢馬に水を飲ませていると、アシ

エリが感心したようにうなった。

「あれだけの水で足りるものだろうか、正直なところ不安に思っていたのだが。着いてみれば、ずいぶんと余裕があったな。さすがは名に聞く、イビタルの案内人だ」

何をいうかと思えばと、ヨブは肩をすくめた。

「ふたつ先のオアシスまでもつだけの水を用意するのは、砂漠を旅するものの鉄則だ」

「へえ、そういうものか」

「あてにしていたオアシスに、ようようたどりついてみれば、すっかり水が枯れていたということも珍しくはないのだ。それがたとえ、何百年と続いた町であっても」

声を落として、ヨブは説明した。この町もまた、二百年あまりの歴史を誇るオアシスだった。

「それで、二つ先か。なるほどなあ」

いちいち感心したように、アシエリはうなずいている。ヨブは呆れて首を振った。

しかし通常の道行きであれば、そもそももっと水場の多い道を通るものだった。砂漠の中ほどを横切るように大河が流れており、その周囲には人里もまた多い。河の流域に沿って旅をできるときには、多少遠まわりをしてでもそのようにする。大河ならばオアシスに湧く水と違って、水量が減ることはあっても、枯れることはまずないからだ。

だが今度の道行きは、まったく別の方角で、しかも人里の少ないほうへ、少ないほうへと向かっていく。途中からは、よほど正確に進路をとらなければ、灼熱の太陽に焼かれてあつという間にひからびてしまう。交易を生業とする旅なれた者でも、避けたがる道だ。

アシエリは軽い気持ちで持ち上げてみせたのかもしれないが、フアナ・イビタルの者、それもよほど南部の地理に精通している一握りの男以外では、灼熱の海へ生きて案内することは、まずできない。ヨブにはそれだけの自負があった。

そうした場所へ、大金を積んでまで、なぜ行こうというのか。案内された大部屋で隅のほうの寝台へ陣取りながら、ヨブは何度目かの問いを口に乗せた。

「なぜお前は、涯の海などへ行きたがるのだ」

アシエリは曖昧に笑うだけで、答えない。だがヨブとしては、なんとしてでも確かめねばならないわけがあった。その近くには、禁域があるからだ。

部族の中でさえ一握りの者以外にはその場所をかたく秘された土地が、砂漠の南西にはある。アシエリがもしも言葉どおりに海へ向かいたいのではなく、その存在をかぎつけて秘密を探ろうとしているのならば、捨て置くわけにはいかなかった。

だがこの男が何も知らない場合、下手な問い詰め方をすれば、かえって隠したいものがあることを勘ぐらせてしまうかもしれない。ヨブはひとまず追及することを諦めて、嘆息した。

「まあいい。午後遅くに買出しに出かけて、日が沈んだ直後に発つ。しっかり休んでおけ」

「わかった」

アシエリは素直にうなずいて、さっさと寝台にもぐりこんだ。

その場所に近づくまでに、うまく聞き出す方法を考え出さねばならない。蚤の跳ねる掛布にもぐりこんで、ヨブは目を閉じた。

考え事のせいか、眠りはなかなか訪れなかった。空が白んだあとになって、ようやくヨブは浅い眠りについた。そしてきれぎれの夢の中で、この旅を命じた長の、表情のない顔を見た。わかっているなど念を押した、温度のない眼を。

翌日は風がなかった。砂は舞い上がらず、空がよく澄んでいる。その分だけ陽射しはより強く、二人は予定よりも日が傾くのを待ってから宿を出た。

「それにしても、砂漠に入ってから以来、女の姿をほとんど見ないな。

いてもガキか、婆さんばかりだ。いったい女たちはどこにいるのだ」
アシェリがそんなふうによやいたのは、市場で食料を買い込んで
いる最中だった。固焼きパンと引き換えに、店主へ銅貨を渡しなが
ら、ヨブは振り返らずに答えた。

「女がおいそれと外を出歩くものではない」

「そんな話があるものか。夜中だともいうならわかるが、まだ空
も明るいのに」

「陽が高かろうが、若い女が、男のいる場所に姿を見せるものでは
ない。そのようなことをするのは、娼婦くらいのものだ」

ヨブが苦々しくいきると、アシェリは啞然として、手にしてい
た荷を取り落としかけた。だがヨブは、男の無知を笑いはしなかつ
た。北の国々では、女たちが顔を晒してそのあたりの道を歩いてい
るところもあると、前に聞いたことがあったからだ。眉唾ものの話
だと、耳にしたときには思ったが、アシェリの様子からすると、そ
れも本当のことなのだろう。

「では、どうやって暮らすのだ。水を汲むのは。日々の買い物は」
「売りにくる。それで足りなければ、子どもか下男でも使いに出す
だろう」

それを聞いたアシェリは、頭を振ってため息をついた。

「なるほどなあ。女たちを家の中に隠しているというわけか。値の
張る持ち物をそうするように」

その口調は、皮肉めいてはいなかったが、ヨブは思わず顔をしか
めた。

「では訊くが、お前たちは自分の女にそのあたりを出歩かせて、平
気だというのか。どこの誰とも知らない男の、目に付くところに」
くくつと喉の奥で笑って、アシェリはいった。

「なるほど、賢いやり方なのかもしれないな」

言葉としては肯定だったが、納得したというような口調でもなか
った。それからふと思いついたように、アシェリは問いを重ねた。

「それでは、貧しい男たちはどうするのだ。女を家で遊ばせておく

ような、資産のない男は」

「そのような男に、妻を娶る資格などあるはずがない。小金があるときに、安い娼婦でも買うだろうさ」

財のある男は何人でも妻を持つのが当然のことだし、逆にそれだけの男でなければ、父親もなかなか娘をやりたがらない。食料を買い込む合間に、ヨブがそう説明すると、アシェリは理解し難いというように、首を降って肩をすくめた。

「娘をやる、というのがまずわからん。女とは、やったりもらったりするものではないだろう」

「では、お前の故郷ではどうするのだ。妻を娶らなければ、子は。家は誰が継ぐのだ」

「ふつうは男も女も、己が生まれた家で一生を終えるものだ」

アシェリはあっさりとした調子でいった。「女はその家で子を産んで育てる。その顔を見るために、男はせつせと女のもとへ通う」

あまりの話に、ヨブが言葉をうしなう番だった。アシェリはため息交じりに付け加えた。

「いっておくが、俺の故郷だけではないぞ。いままで見てきた限りでは、そういう国がほとんどだった」

その家にあまりに女ばかりが生まれすぎるようなら、家を分けるか、養女に出されることもあるが。そう説明しながら、アシェリは未練がましく、女の姿のない雑踏を見渡した。

「しかしそれではいったい誰が、女たちを食わせるのだ。親兄弟か」

「男がわざわざ食わせずとも、女たちは勝手に食うさ」

なんとということもないようにアシェリはいい、ヨブはとっさに天を仰いだ。

女に外で働かせるなどということは、男にとって、恥以外のなんでもない。戦や病で稼ぎ手を失えば、女もやむに止まれず酌婦もやろうし、体も売ろう。気の毒な話とはいえ、しばしばあることだ。だがアシェリにとっては、女が働くというのは、むごいことでも何でもないようだった。

「山あいの、畑だの織物だので食っていくような村ならば、女たちのほうが、男よりもよほど働く。まあそうした按配は、土地ごとに違うものだが」

ヨブは首を振って、それ以上の質問を差し控えた。聞けば聞くほど、頭の痛くなるような話だった。

妻たちが自分の知らない間に出歩いて、気軽にほかの男と口を訊くところを思い浮かべて、ヨブは己の想像に勝手に腹を立てた。

風がない分、昨夜よりいっそう星明かりが眩しかった。その中を歩きながら、アシェリは砂漠の暮らしについて、飽きずにあれこれと質問をかさねた。それにひとつずつ答えてやりながら、それにしても口数の多い男だと、ヨブは面覆いの下で苦笑した。

やがて夜ふけになり、背後から上ってきた月に照らされて、二人分の影が細く伸びた。自分の影と、その横でより長く落ちる連れの影を見ながら、そういえば十年前のあの男も、アシェリと同じようにひどく背が高かったと、ヨブはふとそのことを思った。

「砂漠の外では、みなお前のように背が高いのか」
アシェリはさて、と首をかしげた。

「俺はまあ、故郷のほかの連中と比べれば、かなり背のあるほうだったが。しかし、土地によってさまざまのようだ。ずっと北のほうの土地には、まるで巨人のような大男たちがいるからなあ」

「まるでおとぎ話だな」

半信半疑でそう返すと、アシェリは笑ってうなずいた。「遠い国の話というのは、そのように聞こえるものだ」

砂漠は広い。異なる三つの言葉を話す何百万もの人々が、四つの国と五十を越える部族にわかれて、各地の水場に点在するように暮らしている。いま目指している南西の海岸をのぞけば、まるで涯がないように思えるが、その砂漠にも限りがあるのだという。そのことに、ふと眩惑されるような思いがして、ヨブは首を振った。

「世界は、砂漠をいくつも集めたよりも、ずっと広いのだというが」
ヨブの呟きに対して、アシェリはどこか厭かな調子でうなずいた。
ヨブはいっとき無言で、砂漠よりも広い大地というものを、想像してみようとしたが、じきに諦めた。途方もない話だ。

「この砂漠では、太陽や月は、ほとんど頭の上を通るだろう」

アシェリが突然、そのようなことを言い出したので、ヨブは面食らった。怪訝な思いを隠しもせずに、それでもいちおううなずいて見せると、アシェリは楽しそうに目を輝かせていった。

「では、北にゆけばゆくほど、その通り道が低くなるのを、あんたは知っているか」

この問いにも、ヨブはうなずいた。南北へ旅をすると、月や星の高さはわずかに変わる。地平線の向こうに隠れて見えなくなる星もある。そのようなことも知らずに、砂漠の旅などできようはずがない。

「へえ、さすがは旅人の国だな。俺の故郷では、誰ひとりその話を知らず、何をいっても信じようとはしなかった。俺はあの村では、頭のおかしい男だと思われているのだ」

そういうわりには、それを気に病むふうもなく、アシェリはさも可笑しそうにくつくつと笑った。

「それではあんたは、さらにどこまでも北を目指すと、その涯にはどのような場所があるか、知っているか」

「冷たい海があるのだろう」

聞きかじりの知識でヨブが答えると、アシェリは笑って首を振った。「そのさらに北だ」

ヨブが降参の意味で首を振ってみせると、アシェリはにやりとした。

「北の涯の、そのさらに最果てまでゆくと、そこには太陽の沈まない国があるのだそうだ」

「なんだ、馬鹿馬鹿しい」

ヨブは一蹴して、真面目に話を聞いた自分の馬鹿らしさに腹を立

てた。

「信じないか」

「信じられるはずがないだろう」

ヨブがいうと、アシェリはあっさりとうなずいた。

「そうだな。俺も実は、まだ信じられない。自分の目で見たわけではないからな。だが、いつかは行って、確かめてみたいものだ」

そういうアシェリの目は、楽しげに輝いている。その少年じみた表情を見て、ヨブは首をひねった。外見からは自分と同じ年頃のように見えていたが、もしかするとこの男は、思っていたよりも若いのではないかという気がした。

「お前、歳はいくつだ」

「歳？」

鸚鵡返しに聞き返されて、ヨブはまさか、と思った。

「お前、自分の歳も知らないのか」

「歳というのは、いったいなんのことだ」

ヨブは目を剥いた。異国の者だけに、ただ単に歳という単語を知らないだけかとも思った。

だが、何度か訊き方を変えてみても、アシェリは困ったように首をかしげるばかりだった。ヨブは恐る恐る質問を変えた。

「まさかお前たちの土地では、自分が生まれてから何年が経ったかを、数えないのか」

「待ってくれ。年、というのはなんだ」

絶句して、ヨブは目の前の男の顔をまじまじと見た。だが、そこにはとぼけてみせるような調子は、まるで見当たらなかった。

「……空の星は時間が経つにつれて、ゆっくりと空を巡るだろう。」

あの位置が、日を追うごとに少しずつずれていくのは知っているな」
もちろんだといって、アシェリはうなずいた。そのことにいくらか安堵しながら、ヨブは続けて確認した。

「では、月が満ち欠けするのを十六と半分かぞえると、星の位置がすっかりもとに戻るといふことも、知っているだろうな」

ヨブとしては、まさかというつもりで訊いたのだが、アシェリの相槌はあろうことか、「へえ、そうなのか」という呑気なものだった。

とっさに言葉を失って、ヨブは額を押さえた。アシェリは感心したように唸って、空の星を目で追いかけている。

「お前によほど学がないのか、それともお前の故郷では、誰もそのことをしらないのか」

訊くと、アシェリは困ったような顔をした。

「俺はたしかに、学問がない。だがこれまでどこの国を旅していても、そのようなことを真剣に数える人々を見たことがなかった。ただ、砂漠に住む人々が数を大変に重んじるというのは、たしかに耳にしたことがある」

日が何度昇り、月が何度満ち欠けたか。そうした以上の長い単位で時を数える必要を、これまでに感じたことがなかった。アシェリはあっさりとそんなふうに行った。

確かに、砂漠の暦はほかのどの場所のそれよりも、はるかに優れているのだという話は、どこかで聞いたことがあった。だが、そもそも暦を数えない人々がいるということは、ヨブの想像の外のことだった。

いつとき打ちのめされてから、ヨブは唸った。

「学問は俺にもないが、それにしても暦くらいは、子どもにでも読めるだろう。お前はいくつもの土地を旅してきたというが、暦を知らずに、どうやって星を読むというのだ」

ああ、とアシェリはうなずいて、急にわかったような顔になった。何を納得したものか察しがつかず、ヨブが眉をひそめていると、アシェリは面白がるような目をして説明した。

「きつと、それだよ。この砂漠では、星をよく読まなければ旅ができない。だからあんたたちの間では、そうしたことが重んじられるのだろう」

いつていることの意味がわからず、ヨブが聞き返そうとしたとき、

急に強い風が吹いて、驢馬がいち早く身を伏せた。

彼らはいっとき足を止めて、その場で姿勢を低くした。砂が舞い上がり、激しく体を打つ。ヨブは面覆いを引き上げて、しっかりと目を閉じた。アシェリが咳き込むのが、風の音にまぎれて聞こえる。やがて風が止むと、彼らは立ち上がって目を開けた。服を手で払い、顔についた砂をぬぐう。足元には、つい先ほどまでとはまるで違う風紋が広がり、やってきたときの足跡は、すっかり砂に埋もれてしまっている。方角を確かめるために空を仰ぐと、《七の導きの星》は空の端で、ほとんど沈みかかっていた。

アシェリが顔についた砂をこすりながら、話の続きをはじめた。

「ほかの土地では、何も星を読まなくとも、旅はできる。前後左右どちらを見ても同じような景色というのは、砂漠の外ではそうそうないものだ。たいていもっと、地形がはっきりしている」

歩きながら、アシェリは説明した。驢馬の手綱を引きながら、ヨブは信じられないような思いでその話を聞いた。

「だが、歳を数えないというのなら、お前の郷の男たちは、どうやって兵役につくのだ」

その質問に、アシェリは妙な顔をした。

「俺の故郷か。ほかの人里からずいぶんと離れた小さな村で、役人がわざわざ兵士を募りにくるような場所ではなかった。だが、そうだな、俺がこれまで立ち寄った土地では、たいてい兵隊には、なりたくないものがあるようだったが」

「なりたくないものがあるのか」

「いるさ、そりゃあ」

ごく普通のことをいうように、アシェリはいった。「あんたらは違うのかい」

「当たり前だ。そんな臆病者がいるはずがない。いるとすれば、それは男ではない」

あきれ果てて、ヨブは吐き捨てるようにいった。アシェリは反論せず、小さく口の端を上げて、感心してみせた。

「そうか。砂漠の男は皆、戦士なのか。そいつはすごい」

言葉自体は賛辞だったが、その声は本気の調子ではなかった。ヨブは憮然として問い返した。

「それではお前たちの土地では、敵に攻め込まれたら、どうするのだ。兵士でない男は、女子どものように、敵から逃げ惑うのか」

そうだなあ、と首をひねって、アシェリはいった。「まあ、逃げるやつもいるだろうし、いざとなれば鍬でも持って、なりふりかまわず戦うやつもいるだろうな」

「ろくな訓練も受けずにか」

「そうとなればな」

アシェリはうなずいて、それから小さく笑った。

「でも、まあ、俺の故郷では、戦に巻き込まれることなど、まずないからなあ。なんせ、貧しいところだから」

のんびりとそういつて、アシェリは目をこすった。砂が入ったのだろう。面覆いをきちんとつけていないからだと言ったが、それよりも、話の内容のほうに気がなった。

「そんな土地が、あるのか」

「ある。奪ってもうまみのない土地というものは、けっこうどこにもあるものだ。そんなところにも住む人間はいる、というべきだろうか。……ここらでは、戦は多いのか」

「戦など、珍しくもない。水が枯れればすぐだ」

「よそのオアシスを襲って、水を奪うのか」

「ほかにどうする。移住できるような距離に、ほかの水源があるならば、話は別だが」

だがそのような場所は、めったにあるものではない。ヨブがそう続けると、アシェリは何か、考えこむようだった。顎を撫で、鬚の中に絡んだ砂をつまみながら、いつとき沈黙していたが、やがて口を開いた。

「金を払って、分けてもらうことはできないのか」

面食らって、ヨブは目をしばたいた。連れの男の正気を疑いかけ

たが、アシェリの表情を見る限りでは、どうやら真面目にいつてい
るらしかった。

「隣のオアシスが枯れたということは、地下水脈の動きが変わった
ということだ。こちらのオアシスも、じきに枯れる可能性がある。
そのようなときによそものに水を分けて、自分の一族を渴かせる危
険をおかす長など、そういるものか。いるとすれば、よほど金に目
の眩んだ愚か者だ」

「そういうものか」

アシェリは納得しがたいように首をひねって、遠く、地平線を見
渡すような仕草をした。そんなことをしても、砂漠の遙か地下の水
脈が、透けて見えるわけでもないだろうが。

やがてふたたび風が吹いて、砂が舞い上がり始めた。今度は足を
止めねばならないほどのものではなかった。砂が目や口に入らぬよ
う、ヨブは面覆いを上げて、足を速めた。

歩きながら、ヨブは渴きを恐れずにいられる世界に思いをめぐら
せた。いつでも雨が降り、女たちが自由に外を出歩く土地。年月を
数えることを知らぬ人々の暮らすという土地に。

途中で一度だけ、砂嵐が激しく足止めをくらった晩があったが、
そのほかではごく順調な道行きだった。

いくつものオアシスを転々と辿りながら、南西へ進んでゆくにつ
れて、砂はいっそう熱さを増す。やがては夜になっても、かなりの
時を待たねば、靴を履いた足が焼けると思えるほどに。

各地のオアシスを辿りながら、十二夜をかけて歩いたところで、
延々と広がっていた砂の海は、ひび割れた赤い大地へと変わった。
南西の岩砂漠、人の住まぬ不毛の大地だ。

宙を舞う細かな砂がない分、空はくっきりと澄んで、北の砂漠で
は見わけることのできない暗い星までが目映る。空を見上げて、
ヨブは目を細めた。流星が南の空へふたつ続けて、尾を引いて落ち

ていく。

新月を過ぎて、いまは徐々に月が膨らんでゆく時期にあたる。アシェリがつられたように青褪めた半月を見上げ、ふとため息を漏らした。

「それにしても、不思議なものだ。土地が変われば、月がのぼる高さどころか、色まで変わる。これほど青い月を、俺は初めて見るぞ」ヨブは黙って肩をすくめた。案内人としては、この先の道のほうがいっそう神経を使うのだが、岩砂漠に入ってから、アシェリの足取りは、むしろ軽くなったようだった。

「この先には人里がない。辛い道になるぞ」

そう告げても、そうかとうなずくばかりで、アシェリは不平の一言も口にしない。それがヨブには、意外なように思えた。

「しかし、そういうわりには、水はあまり積まなかったのだな。食糧はずいぶんと、多めに買い込んだようだったが」

アシェリは不思議そうにいつて、荷を運ぶ驢馬の黒い瞳を覗き込んだ。

「ああ。水場を辿ってゆくからな。だが、人の住む町はない」

「水があるのに、住む者がいないのか」

「夜にしか外を歩いていないから、実感が湧かないかもしれないが、ここまですればもはや、短い時間ならば太陽の下に出ていられるというような土地ではないのだ。人などあつという間に、焼け死んでしまう」

そのような土地に人は住めまい。そうヨブが説明すると、アシェリはへえ、と感心したような声を上げて、足元を指さした。

「だが、獣や虫はいるようだ」

その指の先には、赤茶けた毛皮の鼠がいた。器用に虫をつかまえて食べていたのが、こちらの視線に気づいて耳をぴくりとさせると、あつという間に走り去ってしまった。

「砂漠では、夜のほうが賑やかだな。ああしたやつらは、昼間はどこにいろのだらう」

「砂の中に。岩陰に。あるいは地の底に」

「地の底？」

聞き返されて、ヨブは思わず苦笑した。この男と話していると、まるで小さな子どもにものを教えているようだった。とりわけものを知らないことを、ちつとも恥ずかしがらないところが。

「そうだ。砂漠の地下には、水脈があるといっただろう。地面の下にはところどころ、水に削られた空洞がある。そういう場所を辿って、ここから先の道をゆくのだ」

「日中を、地下にもぐってやり過ごすのか」

「ああ」

ヨブがうなずくと、ひどく感心したように唸って、アシェリは顎をこすった。

「そういう場所は、たくさんあるのか」

「まれだ。だから、正しく辿る道を知らなければ、このあたりの土地を生きて通ることはできない」

二度うなずいて、アシェリは遥かに煙る地平線を、見通すような目をした。ここから海が見えるわけでもあるまいが。

夜も更けた頃、ヨブは少し休息をとろうといって足を止めた。驢馬にも荷を下ろさせて座ると、赤い大地はすでに熱を失っており、二人の尻を冷やした。

熱い珈琲を沸かし、塩の欠片を舐めるあいだ、アシェリはいつとき無言で座っていたが、やがてぽつりと問いかけを落とした。

「海までは、あとどれほどだ」

「九夜を歩けば、その次の夜の早い時間には、海をのぞむ場所へ出る」

ヨブは断言した。砂嵐はここまではやってこない。また、精確な日程と道のりを辿って、かならず陽の昇る前に次の地下洞窟まで辿りつかなければ、どのみち灼熱の陽に焼かれて死んでしまう。

熱い珈琲を、苦そうにちびちびと舐めながら、アシェリはふと思いついたように、話を蒸し返した。

「なあ、このあたりに人里は、まったくないのか」

「そういったらう」

呆れたように答えながら、ヨブはひやりとするものを胸のうちに覚えた。

「そうか。そうだよなあ」

「なぜ、こんな不毛の大地に、人が住むと思うのだ」

穏やかならぬ内心を押し殺して、ヨブは訊いた。

「あんたが道をよく知っているから」

アシェリはなんでもないようにいって、辺りを見渡した。「用もないのに、こんな遠くの土地まで、道を知り尽くしている必要はないだろう」

「塩を取りにくるのだ」

用意していた言葉を口にして、ヨブはアシェリの表情を観察した。だがいくら見ても、言葉以上の他意をそこに見出すことはできなかった。

「目的の海辺からは少し離れるが、よい塩が採れる場所がある。だがそこは、我々の聖地でもある。けして盗もうなどと思うなよ。神罰が下るぞ」

嘘ではないが、事実のすべてでもないことを告げて、ヨブは厳しい目を向けた。だがアシェリは肩をすくめて、あっさりと言いたげに笑った。

「盗むものにも、あんたが道を教えてでもくれないかぎりには、俺はそこにたどりつけもしないだろうさ。それに、あんたらにとって塩は貴重品かもしれないが、ほかのたいいていの土地では、それほど高価なものでもない」

そんなふうに応えたアシェリの表情は、こちらの言い分をまるきり信じているように、ヨブの目には見えた。

真実は、塩どころの話ではなかった。もしもアシェリが、聖地の真実を知り、あるいは探るそぶりを見せようものならば、それなりの手段に出ねばならなかった。長の冷ややかな眼を思い出して、ヨ

ブは暗澹たる思いをもてあました。

秘された聖地の名を、エルトーハ・ファティスという。いま彼らがいるこの場所から、歩いてほんの数日の距離に、その場所への入り口がある。

ヨブはアシェリに、こんな場所に人は住めないといったが、それは地上の話だ。地下深くには何千人という人々が、身を寄せ合って暮らしている。

彼らは遙か遠い過去にイビタルの一族から分かれた、遠い遠い血族だ。豊かな水を湛える暗がりの町で暮らす彼らと、毎年さだめられた日にファナ・イビタルから訪れた商隊とは、ひそかに荷のやりとりをする。

なぜ聖地の存在が、固く秘されなければならないのか。人々がなぜそうまでして、このような不毛の地に隠れ住まなければならないのか。

エルトーハ・ファティスでは、尽きせぬ銀が採れるのだ。

明け方まで間もない時刻に、二人は最初の地下洞窟の入り口へとたどりついた。

ひたすら平坦な地面にときおり岩の転がる、広大な岩砂漠の中で、その辺りだけ地面にいくつも亀裂が入り、あるいは突如盛り上がって崖を為している。その崖にひび割れが開いて、そのまま奥深くまで続いていた。

こうした洞穴には天然のものもあれば、かつて掘られた鉱脈のなごりもある。この場所は前者だった。

最後のオアシスから距離があったため、ふたりはこれまでの旅路よりも、早足で歩かねばならなかった。旅の前半では、アシェリのほうが疲れをあらわにしていたのだが、打って変わって、いまではヨブよりよほど余裕があるように見える。それがヨブには意外に思えたのだが、訊けば、アシェリはあっさりと笑って説明した。これ

までは砂に足をとられることに慣れていなかったため、体力を消耗したのだという。なるほど、もともと世界じゅうを旅してまわっているというだけのことはあった。

空の端はもう白みかかっている。驢馬を先にくぐらせてから、洞穴の入り口で、ヨブはふと立ち止まった。

「どうした」

怪訝そうな声を上げるアシェリを、ヨブは手で制した。

「少し待て。長くはかからない」

「急がなくて大丈夫なのか。陽射しは危険なんだろう」

「そうだが、夜が明けた直後までは、まあ大丈夫だ。地面が熱せられるまでに、少しは間があるから」

なるほど、とうなずいて、アシェリは首をかしげた。

「ならばいいが、いったい何を待っているんだ」

ヨブは答えず、入り口の岸壁にもたれて空を見あげた。

断ったとおり、長くは待たなかった。じきにヨブは、白みがかつた空の端を、無言のうちに指さした。アシェリが顔を上げて、その指の先を見つめる。

白い影がいくつも、薄明に包まれた空を切り裂くようにして、空を横切っていく。最初に三羽。あつというまにそれらが通り過ぎていき、そのあとを、次の四羽が追いかけてゆく。数羽ずつの小さな群れとなってやってきた鳥たちは、はるか地平線の彼方へと、次々に吸い込まれていく。

「あの鳥がヨブだ」

アシェリは空を見上げたまま、眩しげに目を細めた。

「きれいな鳥だな」

鳥たちの姿はじきになくなり、二人はひび割れの奥へ向かった。洞窟は、ゆるやかな下りの勾配になっている。中は暗闇で、入り口から遠ざかると、すぐに足元が危うくなる。ひとりずつ、岩壁に手をつきながらゆっくり進まねばならなかった。

岩肌はひんやりと湿っていた。さらに奥のほうでは、かすかに水

音が響いている。先に入らせた驢馬は、陽の届かない場所でおとなしくうずくまっていた。砂漠に生まれた獣の本能で、いわずとも太陽の恐ろしさを知っているのだろう。

暗闇の中で軽く食事を済ませて、驢馬のそばで待っているようにアシェリへ言い残すと、ヨブは手探りで奥に向かった。少し距離はあるが、それでも歩いて下れるところに、細い水の流れがある。

二人ぶんの皮袋に水を満たして、ヨブは何度も暗闇の中を往復した。次の水場まで、ここで汲んだ水でもたせなくてはならない。

やがてじゅうぶんな量を汲んだところで、ヨブも腰を下ろし、体を休めた。先に眠っていたかと思ったアシェリは、岩壁に背中をもたれかけさせて、水音に耳をすませていたようだった。

「不思議なものだ。外はもう、灼熱の大地へと変わっているのだろう。さっきの鳥たちは、どうやって生きているのだろうか」

まだどこか心を空に残したような声で、アシェリが呟いた。

「あの種類は、翼が強い。この目で見たわけではないが、話にきくところによると、焼け死ぬ前に砂漠の上空を抜けて、さらに遠くの空まで飛んで行くのだそうだ」

へえ、と感心したようにいって、アシェリは笑った。「いい名前じゃないか」

洞窟の中は暗すぎて、ヨブにその表情は見えなかったが、目じりに皺を寄せて笑うそのようすが、目に浮かぶような気がした。

この妙な男を気に入っている自分に、ヨブは気がついていて、そしてそれは、決して都合のいいことではなかった。もし、アシェリが聖地の存在をかぎつけたとして、果たして自分にこの男を殺せるのだろうか。ヨブは自問したが、答えは見出せなかった。

「なぜお前は、灼熱の海などを見たいというのだ」

ほとんど切実な思いで、ヨブは何度目かの問いを口にした。

アシェリは笑ってごまかす代わりに、言葉を探しあぐねるような沈黙を置いた。何度か、なにかを言いかけては、口ごもる。

どうか話してくれと心のうちに念じながら、ヨブは待った。何か、

俺が納得し、安心してお前を連れ帰ることができるような、そういう理由を聞かせてくれ。

「もう少し」やがてアシェリは、ぽつりといった。「もう少しして、海が見えたなら、そこで話そう。いまはまだ、どうにもうまい言葉が見つからない」

そうかと答えて、ヨブは嘆息をこらえた。

ヨブは眠る前に、自分の荷を引き寄せた。香料を取り出して、壁にこすり付ける。闇になれた目が、かすかにものの影を捉えている。真暗闇に見えても、入り口の亀裂からの光が壁に弾かれて届くのだろう。

「何か、妙なおいがするな。薄荷のような……」

アシェリがいつて、落ち着かないように影が揺れた。

「我慢しろ。蛇よけの香だ」

へえ、と感心したように相槌をうつて、いつとき沈黙してから、アシェリは感慨深げに呟いた。

「蛇というものは、どこにでも仲間がいるのだなあ。山の中しかり、水の中しかり……」

何にそれほど感心するのかわからなかったが、ヨブは口をはさまずに、アシェリが話すに任せて耳を傾けていた。

「俺は実際にやってくるまで、砂漠というものは、もっと生き物のいない、不毛の地だと思っていた。だが、人は大勢住んでいるし、ちゃんと虫も獣も、蛇までいる。セスはさすがに、いないだろうなあ」

「セスとはなんだ」

「水の中の生き物だ。蛇のような鱗があって、蛇ほど細長くはない」

「ああ、魚のことか」
いるのか、と驚いたような声を上げたアシェリに苦笑して、ヨブはいった。

「いるさ。なんなら帰りにオアシスの水を、のぞいて見るといい。ただし、水泥棒に間違えられないよう、気をつけることだ」

話しながら、この男を連れてファナ・イビタルへ戻るつもりでいる自分に気がついて、ヨブは暗闇の中で目を伏せた。

四日後、五つ目にたどりついた地下洞窟は、ほかとくらべて、ずいぶんと広さがあった。水音も、遠くでひっきりなしに響いている。身体を休めようと横になりながらも、その音が気になるのか、アシエリはなかなか寝付けないようだった。何度も身じろぎするせいで、そばにいる驢馬が落ち着かず、迷惑そうに耳をぴくぴくさせている。ずいぶん口数の多い男だと思っていたが、目的地が近づくにつれ、なぜかアシエリの口は、少しずつ重くなっていくようだった。この日はとうとう、歩きながらほとんど何も話さなかった。

それでもさすがに、やってこない眠気をもてあましたのか、アシエリはほとんど何時間ぶりかで、物憂げに口を開いた。

「この奥には、何があるんだろうな」

その問いに、ヨブは闇の中で陰しく目を細めた。それでも声に警戒を出さないように、努力を払いながら、なんでもないように答えた。「滔々と流れる、冷たい水が」

「この空間は、どこまで続いているんだろうか。途中ですっかり水に埋まってしまうのか」

「さてな。……奥へ入ってみようなどと思うなよ。命の保障はできないぞ」

「あんたは、ずっと奥までいって見たことがあるのか」

「いいや。だが、こういう洞窟の奥には、ときに蛇ばかりではなく、人を襲う獣がいる」

「こんな、日も射さない闇の中にか」

アシエリは驚いたようだった。ヨブは相手に見えないことを承知でうなずいて、重々しくいった。

「そうだ。目でもものを見るかわりに、鼻と耳が利く。鋭い牙と爪を持つ、凶暴な獣だ」

ヨブは話しながら、自らも闇の奥に目を凝らした。

「足元が脆くなっている場所もある。砂漠の地下水脈は、地上のようすからは想像もつかないような激流だ。落ちれば、ひとたまりもないぞ」

「見てきたようにいうのだな」

ひやりとしながら、それを声音に出さないように、ヨブは言葉を返した。

「いくつもの話が、語り継がれているのだ。砂漠に暮らすものならば、幼い子どもでも聞き知っている」

へえ、と感心してみせる声が、いくらか元の明るさを取り戻したようだった。「なにか、聴かせてくれるか」

アシェリのその言葉に、他意はないように思われた。

「俺はあまり、よい語り手ではないが」

そう前置きして、ヨブは少し考えた。それから語り始めた。砂漠の地下洞窟に広がる、暗闇について。

真アデイス暦で九八一年のことというから、三百年あまりも昔の話になる。ああ、そうだ。十六と半月で一年だと教えたな。つまりは月が、五千も満ち欠けするほどの遠い昔のことだ。

いまはとうの昔に枯れた南東部のオアシス、ファナ・ノーヴィスに暮らしていた部族の若者が、遠路はるばるこの南の岩砂漠まで、五人の手勢を率いてやってきた。いや、いま俺たちがいるこの洞穴ではないだろう。正確な位置は知られていないが、おそらくはもと東のほうの地下洞窟ではないかと思う。

五人の手下を率いてきた男の名は、イ・ハイダル。まだ十七歳の——成人してさほどたたない歳若い者で、その部族の長の、三番目の息子だった。

彼は二人の兄に比べれば腕が立たず、学も劣るということで、父である長からは、つねづね軽く扱われていた。それで何とかして功

を上げ、その目に留まろうとしたのだな。

しかしあいにくというべきか、長く戦がない時期が続いていた。当たり前前にしては手柄の立てようもない。それでイ・ハイダルは男たちを従えて、新しい道を拓こうと思った。我々の部族が見つけたような質のよい塩か、そうでなければ砂漠のどこかに眠っているかもしれない、何らかの新しい資源を求めて。

だがこの岩砂漠を生きて通ろうと思えば、いま俺たちがそうしているように、日のないうちに次の洞穴へとたどりつかねば、まず命はない。しかし彼らは初めてその土地に足を踏み入れたのだし、夜更けまであてもなく彷徨い、あるかないかもわからない洞穴を探さねばならなかった。それも、身を潜めて陽を避けるに十分な深さのものでなければ、意味がない。そうした場所が見つからなければ、夜明けまでに急いで引き返すよりほかはない。

それだけでもイ・ハイダルの手下たちにとっては、貧乏くじであったのに、さらに、この若者は血気盛んで、年若いものにありがちなように、無謀さをこそ勇敢な男の証だと思ひ込んでいた。

彼らは最後のオアシスを拠点に、夜毎に岩砂漠を歩きとおしては、そのたびに肩を落として引き返した。また次の夜には、何の確信もないままに、前の夜と違う方角へと向かう。そのようにして、十日目の夜更け、ようやく彼らは最初の水場を見つけた。

それは長い長い地割れの跡で、まるで地面を切り裂く巨人の爪あとのようだったという。その底に、苦勞して体をひねってようやく入れるほどの隙間が、ぽっかりと暗い口を開いていた。

彼らが行き当たった洞穴には、かなりの奥行きがあるようだった。地下洞窟の中には、入ってすぐに水に埋もれてしまうところもある。かなり距離にわたって、長い空洞が続いている場所もある。地下洞窟を抜けて、別の地上の出口につながっている場所も、中にはまれにあると聞く。そうした道を見つければ、夜明けのせまるのを恐れることなく、長い距離を稼げるかもしれぬ。見つけた洞穴の奥へ奥へと、イ・ハイダルは進んでいった。連れてきた男たちが引

き止めるのも聞かず、手には雄雄しく松明を持って。

ああ、俺は洞穴の中で、火を使わないだろう。炎はこうした暗闇の中で、多くの危険を退けるものでもあるが、その反面、ひどく危険な場合もあるのだ。地下にはごくまれに、火薬のような性質を帯びた空気が、よどんでいることがあるから。

いまこの場所がそうであるように、イ・ハイダルの入ったその洞穴でも、遠く足元より、水音がどうと響いていた。その音を聞きながら歩くうちに、とつぜん何かが崩れる音がして、男たちの一人の姿が、一瞬にしてほかの五人の視界から消えた。ひきつれたような悲鳴が暗闇の中で長々と響きわたり、その声は急激に遠ざかりながら、やがて水音にまぎれて消えた。

イ・ハイダルが松明を足元によせると、そこには黒い穴が、ぱっくりと口をあけていた。その先は果てのない奈落の闇で、落ちた男の姿どころか、水面が松明の光を反射することさえなく、形のあるものは何ひとつ見出すことはできなかった。

残る四人の男たちは怖気づいたが、イ・ハイダルは仲間の犠牲を無駄にする気かといって彼らを叱咤し、さらに洞穴の奥へ奥へと足を進めた。

やがてイ・ハイダルは、足に激痛を覚えて悲鳴を上げた。驚いた男たちが、ハイダルの足元に駆け寄ると、そこには目のない小さな蛇がいて、ハイダルの脛に、服の上からしっかりと牙を突き立てていた。

怒って蛇をつかみ、打ち殺して投げ捨てたハイダルは、なに、大したことではないと強がって、また歩き出した。蛇が思いのほかに小さかったことに気づいて、大げさな悲鳴を上げた己を恥じたのだろう。大またに歩んでゆくハイダルの背を追いかけているが、男たちは顔を見合わせて肩をすくめた。

いつとき歩くと、道は二股に分かれていた。壁に手をついて、左手の道へと彼らは進んだ。そちらから、より強く水音が響いたように思われたからだった。

どれほど歩き続けた頃だろうか、やがて四人の手下のうち、二人が突然よろめいて、ほとんど倒れこむように、その場にうずくまった。

その段になってイ・ハイダルは、手にもつ松明の火が、ひどく暗くなっていることに気がついた。長さは充分にあり、湿気っているわけでもないというのに。

地下に溜まる毒気の中には、火薬のような働きをするものもあれば、なんの臭いもせずに、ただ静かに人の息を止めてしまうようなものもある。そうした空気は、ときに炎を弱める働きをするものだ。まだ歩ける三人があわてて仲間の肩を支えて、彼らは道に戻りにかかった。そして、先の分岐のところまで来たところで、支えてきた二人を地面に横たえると、ひとりをはじめに顔色を戻したが、ひとりはまだもう二度と、目覚めなかった。

そこで残った手下のひとりが、泣き言を漏らした。命あつてのものだねだ、このような場所に長くとどまるべきではない。一刻も早く引き返そう。そうしないというのなら、もうあんたの指図には従わないと。

だが、イ・ハイダルはなかなかうなずかなかった。もう一方の右手の道をゆけば、その先は豊かな水場につながっているかもしれない。しかしすでに二人を失ったあとのことだし、ほかならぬハイダルの足も、ひどく膨れ上がっていた。蛇の毒が回ったのだ。それにもかかわらず、ハイダルは右の道を、そこから続くかもしれない栄光を、諦めきれぬようだった。いや、本音のところでは、彼も引き返したかったのかも知れない。だが意地が、彼を引き止めていた。

ほかの二人の男たちは、顔を見合わせて、どうしたものか決めかねた。二人とも、本音のところでは引き返したかったし、ハイダルへの忠誠心もさしてあつたわけではないが、しかし彼の父親のことは恐ろしかった。

だが結果的に、彼らはその道をゆくことはできなかった。右手の道から、低い唸り声が響いたのだ。

あつと思つたときには、風がイ・ハイダルの頬をなでていた。その次の瞬間には、死したる男の亡骸が、彼の腕の中から失われていた。

何が起こったのか、誰にもわからなかった。やがて暗闇の中に、ふたつの青白い光が見えた。それは白濁したふたつの目であり、ものが見えているとも思えないにもかかわらず、あやしく輝いて、彼らのひとりひとりを見据えた。

やがてどさりと音がして、何かを食いちぎる濡れた音が、闇の中から響いた。それから、固いものを噛み砕く音が。ようやく男たちの誰かが悲鳴を上げると、化け物はゆるりと足を動かして、松明の光の届くところへと姿をあらわした。

それは獅子に似た、大きな獣だった。獅子よりは小柄だが、その牙は異様なほどに尖っていた。口元がてらてらと血に濡れているのが、彼らの目にもよく見えた。逃げねばならぬとわかっていても、彼らの足は凍りついたようにその場から動かなかった。

自分のわがままにつき合わせて、すまないことをした。突然ハイダルが口にしたその言葉の内容を、手下の者たちが理解したときには、彼はすでに走り出していた。出口ではなく、怪物のいるほうへと向かって。

それでもまだ三人は、動かなかった。己の目で見ているものが、理解できなかったのかもしれない。彼らは立ちすくんだまま、化け物の牙がイ・ハイダルの肩に喰らいつくのを見た。そして部族の若い英雄が、必死の形相で怪物の首を締めようとするところを。

逃げろ。搾り出すようなその声に圧されて、ようやく三人は駆け出した。

地割れの外に顔を出したとき、満月が彼らの頭上に輝き、それはとうに中天をすぎて、ゆっくりと下ってゆこうとしていた。急いで、オアシスまで引き返さねばならなかった。旅立ちが遅れば道半ばにして夜が明け、灼熱の太陽が彼らを焼くだろう。次の晩まで留まれば、化け物が次なる獲物を求めて、暗闇の底から這い出してくる

だろう。

命からがらオアシスまで逃げ延びた若者たちは、次の晩、大勢の男たちを引き連れて、くだんの洞窟を目指した。だがそこで彼らが見たものは、首をへし折られて息絶えた盲目の獣と、その巨大な首にしがみつき、目を見開いたまま冷たくなっている、イ・ハイダル
の亡骸だった。

うなだれて自分たちのオアシスまで戻った三人の若者は、長の足元に這いつくばって詫び、彼の息子の勇敢なる死を伝えた。厳格なことで知られた長は、彼らの話を聞き終えて、滂沱の涙を流したという。それから、死して面目をほどこした末の息子のために、壮麗な墓碑を築き、そこに彼の物語を刻ませた。

いまでもその碑は、水枯れて人の住まなくなったファナ・ノーヴィスの地に、変わらずそびえている。

「あんたはうまい話し手ではないといったが」

ヨブが語り終えると、アシェリはそういつて、息を吐いた。「それが本当なら、砂漠の人々はそろって、語りの名手なのに違いない」大仰な贅辞を聞き流して、ヨブは水で唇を湿らせた。

「これくらいは、道で寝ている乞食でも語るだろうさ。そのあたりのオアシスで聞いてみればいい。砂漠の地下洞窟にまつわる危険な
らば、百と語り継がれている」

「他の話も、聞かせてもらいたいところだが」

あんがい世辞でもなさそうに、アシェリはそういつたが、ヨブは首を横に振って、体を横たえた。

「いや、今日はよしておこう。もう休んだほうがいい。明日は今日よりも、もっと早く歩かねばならない」

アシェリの影は、いつときのあいだ暗闇の奥を見据えるようにしていたが、じきに横たわった。

ヨブは自分が語った話を振り返り、暗闇の中で苦笑した。語りつ

がれる話のうちの半分は事実であり、残りの半分は、このあたりの地下洞窟から人を遠ざけるために、故意に広められた話だった。

地下道の中には実際に、毒の空氣に満ちた空間もあれば、足元の脆くなった場所もある。蛇や盲目の獣も、ところによつては実際にいる。だが、それはよく道に通じているものならば、どうあつても避けて通れぬたぐいの危険ではない。

いま彼らがいる洞窟もまた、ずっと奥へと続いている。そして、険しく長い道には違いないにせよ、複雑に分岐する迷宮のような道を、正しく辿ることさえできれば、その先には、秘された入り口がある。この洞穴もまた、エルトーハ・ファティスまで通じているのだ。地下深くに眠る、銀の鉱脈へと。

同胞とともにその道を通り、かの町に住まう人々と荷をとり交わしたことが、ヨブにはある。

あの場所に住む人々は、壁にまばらに生えたヒカリゴケと、蠟燭の明かりのほかには、地上のわずかな亀裂から差し込むごく弱い陽射ししか知らない。瞳の色が薄く、夜目が利くのか耳がよいのか、暗がりの中でもまるでよくものが見えているかのようにふるまう。

はるか昔に一族からわかれた、遠い血族たち。眼の色ばかりか、話す言葉の抑揚までもが異なる、近しくて遠い人々の姿を、ヨブは暗闇の中で思い浮かべた。かの地へ続く道をかたく秘するべしという掟には、オアシスに暮らす同胞の利益ばかりでなく、彼らの安全もまた、かかっているのだ。

ヨブは己が語った物語の、若くして命を落とした男へと思いを馳せた。命を賭して己の愚かさを償った息子を、滅びた部族の長は、涙を流して惜しんだという。それまで軽んじられていたイ・ハイダルは、命を失つてようやく父親の関心を引いた。

暗闇の中で、ヨブはいつときのあいだ身じろぎもせず横たわっていた。暗闇の中は息苦しく、わかっているなど念を押した長の眼の色が、何度となく瞼の裏にちらついた。

ヨブは神経を張り詰めて耳を澄ませ、アシェリの寢息が深くなる

のを待って、ようやく浅い眠りについた。

そうして長い昼のうちに何度も目覚めては、アシェリが姿を消していないかをくりかえし確かめながら、きれぎれの夢の中に、十年前の旅路をかいま見た。あのとき、たった一人で辿った帰途、果てしないように思われた、長い道のりを。

岩砂漠に入って十日目の夜は、もはや寒くはなかった。あたりはむっとするような湿り気に包まれている。海が近づいてきたのだ。

ほんの数日前には、アシェリが夜の冷え込みに震えていたというのに、いまでは深夜になっても蒸し暑く、ともすればのぼせ上がりそうだった。面覆いも外套もとくに外して、荷物の奥にしまいこんでいる。暑さそのものには慣れているヨブでも、空気が孕んだ水気の多さにあてられて、疲労が増すように思われた。

広大な岩砂漠は途切れ、足元はいつしか水を含んだ土へと変わっていた。風に流される砂でも、硬い岩の大地でもない。それはヨブにとって長いあいだ、世界の涯を象徴する、ひどく特異な光景だった。しかし、アシェリがやってきた砂漠の外では、ほとんどの地面はこのようにやわらかく湿って、風が吹いてもほとんど形を変えないのだという。

だがアシェリの語る大地には、数え切れないほどの草や木が見渡す限り繁っているということだった。比べていま彼らの足元には、ただ赤茶けた土ばかりが延々と広がっている。

流れ落ちる汗を拭いながら、アシェリは辺りを見渡した。

「洞窟の中には苔が生えているのに、一步外に出たとたん、草木の一本もないのだな。見れば地面は湿って、いかにも植物が芽吹きそうに見えるのに」

「夜でこそ、こうして外を出歩くこともできるが、昼間には湯を沸かす鍋の真上のように、熱い蒸気が満ちている。昨日の昼間にいた洞窟でも、ずいぶんと奥のほうまで潜っただろう。それでもせねば、

地上の熱気から逃れられないのだ」

「ここは、死の大地なのか」

妙に深刻な顔つきで、アシェリがそう囁いた。だが、ヨブは首を振った。

「いいや。まったく生き物がいないわけではない」

「沸き立つ鍋の上のようだという、地上にもか」

ヨブはうなずいた。嘘ではなかった。しかしいま、辺りは見渡す限り死のような静寂に包まれている。彼らの足音のほかは、風の音が響くばかりだった。アシェリは腑に落ちないという顔をして、もう一度、周囲を見渡した。

「だが、もう夜だというのに、まるで生き物の姿を見ないぞ」

「いまはな」

素っ気なくいって、ヨブはそれ以上の説明をしなかった。アシェリは首をひねったが、さらに重ねて問うことはしなかった。

一晚を歩きとおすと、赤茶けた崖に、縦に細長く切れ目が入っているのが見えた。細いといっても遠目に見ての話で、近づいてみれば、充分に人の通れる幅がある。ここは水や風の抉った洞穴ではなく、人の手で作られた空洞だった。

ここからまた少し西へ進むと、本当に塩の採れる場所がある。だが、そこまでのあいだには、もう天然の洞窟がない。正確にいうと、かつてはあったのが、五十年ほど前に落盤で、すっかり埋まってしまったのだという。それでヨブの遠い祖先たちが、繰り返しここまです足を運び、夜のわずかな時間を縫うようにして、長い時をかけて人工の洞穴を作った。

「ここが最後の中継地だ」

そういって、ヨブは洞穴の中に驢馬を押し込んだ。人の手で均一に掘られた洞穴には、かなりの奥行きと深さがあり、その奥では、岩壁から冷たい水が滲み出している。彼らは暗闇の中で水を汲んで、体を休めた。

涯の海まではもうわずかな距離だ。しかし、いまからすぐに発っ

て、夜明けまでに戻ってくるには時間が足りない。もうひとつ昼をやり過ぎて、次に陽が沈んでから出立することになる。

「それにしても、すごい霧だな」

アシェリが唸ったとおり、辺りは白い霧に満ちて、それは洞穴の中にまで忍び込んでいた。外に出たところで、もはや空に星の並びを正確に見出すことなど、望むべくもない。だがそれは、あらかじめわかっていたことだ。煮えたぎる海にほど近いこのあたりでは、いつでもあたりは霧に覆われている。その代わりに、濃い霧を透かして頭上に輝く月を頼りに、方角を知るのだ。そのために、満月の夜に到着するように日程を組まねばならなかった。

「ここまで来れば、海は間近だ」

「そうか」

アシェリは、どういふわけか、沈鬱に沈んでいた。あれほど来たがっていた場所が、もう目の前だというのに。

量の少ない食事を終えると、ヨブは壁にもたれかかって眼を閉じた。

アシェリは、まだこの地を目指した理由を、話してはいない。問いただすべきか、ヨブは迷った。銀に用がないというのならば、理由など何でもかまわなかった。だが長は、それでは納得しないだろう。

しかし、どこか思いつめたように沈黙しているアシェリに向かって、無理に問い詰めることもためらわれた。

迷ううちに、いつしか眠りに落ちていたらしい。やがて頬をなでる湿った風に起こされて、ヨブは体を伸ばした。洞穴にふたたび、白い霧が流れ込み始めている。夜がやってきたのだ。

それからさらにしばらくの時を、二人は腹ごしらえをしながら待った。洞窟の奥深くでは、霧はただ湿っているばかりだが、外の熱せられた蒸気がほんとうに冷めるまでには、時間がかかる。

干した果物は、最後のひとつを半分ずつにわけた。干し肉はまだ余裕があるが、人里のある場所に戻るまでのあいだ、帰り道の食事

は、味気のないものになるだろう。

やがて無言で身支度をして、ヨブは不安げに鼻を鳴らす驢馬の背を、なだめるように叩いた。そして自ら背負ってきた荷物のほとんどを、そのそばに置いて、水の袋とナイフだけを腰に括りつけた。

「こいつは、置いてゆくのか」

「目指す場所までは、じきだ。水だけを持って出ればいい。驢馬は、帰りに迎えに来る」

説明すると、アシエリが同じように支度をする物音がした。

二人は無言で洞穴を後にした。空を仰ぎ、丸い月の形と崖の地形とを見比べてから、ヨブは慎重に一步を踏み出した。このような霧の中では、方向感覚はすぐに狂う。月と、おぼろげに見える地形だけが頼りだった。

頻々に空を見上げながら歩くうちに、やがてほとんど何年ぶりに嗅ぐ潮のにおいが、ヨブの鼻をくすぐった。濃い霧と前方の丘とに遮られて、まだ海はこの目に見えないが、あとは時間の問題だった。

やがて、低くどうどうと響く音が、霧を越えて二人の耳に届き始めた。それは、地下洞窟にいるときにはるか足元から聞こえる音にも、どこか通じるものがあったが、それよりもさらに低く、そしてゆったりとした強弱があった。

「潮騒だ」

アシエリは呟いて、耳を澄ませた。ヨブは驚いて、勢いよく連れの横顔を振り返った。それが潮騒だとわかるからには、同じ音を、かつて聞いたことがあるに違いなかった。

「お前は、海を見たことがあるのか」

「ああ」

アシエリはあっさりとうなずいた。

「それならば、いったいなぜ道案内などが必要だったのだ」

ヨブが納得のいかない思いを抱えて問うと、アシエリはかぶりを振った。

「俺が知っているのはもっと北の、冷たい海だ。見たかったのは、この海なのだ。ほかのどの海辺でもない、砂漠の涯の、灼熱の海だ」

その声は、砂に噎れたためばかりでなく、ひどく掠れていた。

アシェリがかつて見たという、煮えたぎっていない海、北の冷たい海というものを、ヨブは想像しようとしてみた。だが叶わなかった。ヨブにとって海とは、いつでもぐらぐらと沸き返り、蒸気を吹き上げて先の見通せない、黒い水の溜まりのことだった。

そして、見たかったというわりには、海辺に近づくにつれてアシェリの足取りは鈍く、重くなるようだった。それにつきあって、ヨブもまたゆっくりと歩いた。

霧の向こうに透ける真円の月が、ぼんやりとした明かりを夜に投げかけている。辺りには潮騒と、二人ぶんの足音が響くばかりだった。

「あんたに鳥の名をつけたという親父さんは、どんな人だ」

突然、アシェリがそのようなことを聞いてきて、ヨブは面食らった。

「さて。よくは知らないのだ。俺が生まれる前に、死んだというから」

そうかとうなずいて、アシェリは何かいいよんだ。

「そら。あの丘を越えれば、海が見える」

おぼろげに霞む前方の丘を、ヨブが指さして見せると、アシェリは立ち止まり、その指の先をじっと見つめた。それから再び重い足を動かして、ゆっくりと歩き出した。

「俺の親父は、俺がまだほんのガキの頃を最後に、顔をみせなくなった」

アシェリはヨブのほうを見ずに、正面の丘へと視線をやったまま、きれぎれに話した。

「もっともその前から、いつでも旅に出ていて、めったに村には立ち寄らなかつたようだ。……風の民、というのだそうだ。俺のよう

にひとりで好きに旅をして回るのではなく、一族のすべてが一つと
ころにとどまらず、つねに放浪しているのだという。それでもたま
には顔をみせていたのだが、ある日を最後に、完全に消息が絶えた。
行き先は、お袋も村のほかの連中も、まったく知らなかった」

ヨブは黙ってうなずき、よけいな相槌をはさむことは控えた。ア
シエリが約束通り、この海を求めた理由を話しているのがわかった
ので。

砂漠では、人はよく旅をするなど、アシエリはいった。

「とりわけ、あんたらのような商売人は。だが俺の故郷のあたりで
は、人はめったに、旅などはしないものだ。どの父親だって、村の、
すぐ近くの家に住んでいて、数日とあけず子どもらの顔を見に通っ
てくる」

風が鳴り、二人の背中をゆったりと押していた。ヨブの知る限り、
このあたりではいつも、風は海に向けて吹いている。アシエリは淡
々と続けた。

「なぜ自分の親父だけが、いつまでも戻ってこないのか、なぜ遠く
に旅に出る必要があるのか、俺にはわからなかった。近所のガキど
もにもわからなかっただろう。お袋と俺は、親父から捨てられたの
だと、皆が思っていたし、俺もいつからか、そう思っていた」

小さく息をついて、アシエリは続けた。

「ずいぶんと時が経ち、やがてもう二度と戻ってはこないのだろう
と、すっかり諦めた。俺はやがて、自らもあてのない旅に出るよう
になった。べつに、親父を探すという意識はなかったんだがな。だ
がそうなってみると皮肉なもので、最近になって、旅先で偶然、親
父と同じ一族の人間に行きあったのだ」

アシエリは言葉を切って立ち止まり、いつとき眼を閉じた。

「親父は最期に、この灼熱の海を目指したという。そうして煮えた
ぎる海へと入って、命を落としたらしいと、その人はいった」

己の心臓が強く跳ねるのを感じて、ヨブは唾を飲み込んだ。だが、
とっさに言葉は出てこなかった。アシエリはヨブの様子が変わった

ことに、気がついていないのか、再び歩き出しながら、話を続けた。

「もし会うことがあれば、いつてやりたい文句は山ほどあった。会えないままだったのは残念だが、もう死んだというものはしかたがない。せめて親父が最期に見た風景を、この目で見てみたいと思うった」

丘の頂を踏みしめると、足もとにはもう海が見えていた。

アシェリは口をつぐんで、眼下に広がる光景を見つめた。ヨブもまた、蒸気の立ち込める水面へと、視線を向けた。海といっても、その全貌が見通せるわけではない。もうもうと立ち上る白い蒸気の切れ間に、ときおりわずかに黒い波間がのぞき、月明かりを鈍く弾いている。

「……だが俺は、心のどこかで思っていたのだ。煮えたぎる海などというものは、面白おかしく誇張された話に過ぎないのではないか。その光景を見たものがあるというのなら、そこにも人が生きて通る道があるのだろう。それならば案外、親父はその海を渡って、海の向こうにある別の天地を、呑気に旅でもしているのではないか。胸のどこかでは、そんなふうに思っていたのだ」

そうした話を、いままであんたに出来なかったのは、なんのことはない。そんなわけがないといって、あっけなく否定されるのが、怖かったからだ。灼熱の海がどうしたものなのか、あんたはとっくに知っているはずだから。アシェリは力の籠もらない声で、そのようなことをいった。

波の音が轟々とうなり、しかとは見定めがたい水の存在を、強く主張している。風が渦巻き、熱い蒸気が二人に吹き付けた。

ふ、と息をついて、アシェリは顔をこすった。どうやら、自分のいったことを、笑いとばそうとしたようだった。だがその息は低く掠れて、いかにも力のない音にしかならなかった。

「だがこのような海に入って、人が生きていられるはずがないな」
アシェリは言葉を途切れさせて、ふと思いついたように座り込む

と、そのままじつと海を見つめた。夜になってさえもうもうと蒸気を吹き上げる、灼熱の海を。

ヨブは黙って、その隣に腰を下ろした。小高い丘の上から見下ろしていると、波濤の碎ける音が、轟々と地響きのように押し寄せてくる。立ち上る蒸気のせいで、ひどく蒸し暑かった。アシェリは黙り込んで、ただ爛々と光る目で、じつと海を見つめている。

気が進まなかったが、確かめねばならなかった。ヨブは息を吸い込んで、重い口を開いた。

「お前の父親の名は、なんという」

アシェリは振り返らないまま、力のない声で囁いた。

「イーハ。あんたたちのような、姓はない。ただのイーハだ」

ああ。思わず漏れた息が、震えていた。ヨブは天を仰いで、手のひらで顔を覆った。

「その男をこの海まで連れてきたのは、俺だ」

アシェリは振り返って、信じられない話を聞いたというように、ヨブを見た。それから言葉を捜して、何度か息を飲み込んだ。

「……だが、それにしては、あんたは若いだろう。親父が死んだのは、ずいぶん前のことだというぞ」

「ちょうど十年前のことだ」

ヨブは答えて、眼を伏せた。アシェリの目を見て話せる自信がなかった。「俺は十五になり、ようやく一人前と認められたばかりだった」

アシェリが絶句して己の横顔を見つめているのが、ヨブには見なくともわかった。

波が碎ける音が響き、それに遅れて熱気が海より吹き戻ってくる。背後から吹き付けているのは、風ばかりだろうか。何者かの手のひらが、自分の背を海に向かって押しているかのように、ヨブには感じられた。

やがてアシェリが、再び口を開いた。

「親父が死ぬところを、あんたは見たのか」

「いいや。だが……」

言いよどんで、ヨブは唇を引き結んだ。それからゆっくりと、首を横に振った。

問い詰めてくるかと思ったが、アシェリはどうしたとか、無言のまま、黒い海に視線を戻した。波頭がはじけて、蒸気を巻き上げる。風がときおり乱れて渦となり、また海に向かって吹きおきる。ただ座っているだけでも、のぼせそうに暑かったが、石のように動かないアシェリに付き合って、ヨブもじっと海を見つめていた。

ヨブは言葉をさがして、話しあぐねた。何から話すべきか、どう話せばいいのか。語るべきことは、いくらでもあるような気がした。十年前、夜明けの名を持つあの男と、何について言葉を交わし、どんなふうにもこの海までの道を辿ったのか。あるいはどのようなにして、ひとりきりの帰路についたのかを。

アシェリは父親について、何を知っていて、何を知らないのだろう。自分はその男について、どれほどのことを知っているというのだろうか。

考えれば考えるほど、言葉はみつからず、ヨブはじっと、何かを待った。何を待っているのかは、自分でもわかっていなかった。アシェリが口を開いて己を問い詰めるのをだろうか。あるいは夜が終わりに近づくのか。

だが、満月が中天を過ぎて緩やかに下り、やがて低い空に滑り落ちて、アシェリは口をきかず、ヨブが隣にいることも忘れたかのように、じっと海を見つめていた。

その表情は、悲嘆に暮れているというには静かで、感傷に浸っているというには硬かった。

気の済むまで待っていてやりたかったが、月がじきに沈もうかという頃になれば、そうもいっていられなかった。やがてヨブは立ち上がり、アシェリの肩を叩いた。

アシェリは振り返らなかった。肩を叩かれたことにも、気づいていないかもしれない。それほど反応が薄かった。

「戻るぞ」

ああ、と生返事をかえして、しかしアシェリは動かない。ヨブは月を見上げて、それから黒々とした水面を見た。さすがに蒸気はいくらか落ち着いて、海は、打ち寄せる波の動きが見て取れるほどになっている。

「どうしても離れがたいというのなら、いったん引き返して、また夜が更けてから来ればいい」

帰り道を考えながら、ヨブはいった。食料の残りは心もとなかったが、幸い、洞穴まで戻れば水はある。だが、それでもアシェリは腰を上げなかった。ヨブは思わず、声を荒げた。

「お前が死に急ぐのは勝手だが、俺には待つ者たちがいる。こんな場所で死ぬわけにはいかないのだ」

アシェリは振り返らずにいった。「先に戻ってくれ。すぐに追いかける」

そういつて海を見つめる眼は、感情の読めない、奇妙な色をしていた。それが一瞬、十年前の記憶と重なって、ヨブはとっさにアシェリの肩をつかんだ。そしてほとんど怒鳴るようにいった。

「俺に二度、死にゆく友を見捨てさせる気か」

はっと顔を上げて、アシェリはようやく振り返った。その鳶色の瞳に、自分の顔が映りこんでいるのを、ヨブは見た。立派な戦士だと胸を張ってはいえそうもない、情けない顔を。

アシェリはゆっくりと目を伏せて、悪い、と呟いた。掠れた声だった。それからようやく腰を上げて、海に背を向けた。

一晩中座っていたせいか、アシェリはいくらか足元がふらつくようだったが、それでも自分で歩き出した。

「大丈夫か」

歩きながら訊くと、アシェリはちらりと笑ってみせた。

「当たり前だ。べつに何も、薄情者の親父のあとなど、追うつもり

はなかったさ。親が子のために命を懸けるといふならわかるが、子が死んだ親のあとを追うなど、馬鹿げているにもほどがある」

そういう口調は、もとのあつけらんとした調子を取り戻していた。

丘を越える前に、アシェリは一度だけ海を振り返った。じきに陽の光を受けて再びぐらぐらと沸き返るだろう、無慈悲な灼熱の海を。急いで引き返すうちに、薄くなった霧越しに、東の空が端のほうから赤みがかってゆくのが見えた。それもじきに白へと色を変えて、辺りは徐々に明るくなってゆく。途中からは走りに走って、二人は驢馬を置いてきた洞穴を目指した。話をする余裕もなかった。

あと少しというところで、二人は太陽に迫いつかれた。正面、洞穴のある崖の上から、白い鮮烈な曙光が朝靄を払って、彼らの視界へ飛び込んできた。じきにあたりは灼熱の大地へと変わるだろう。夜通し吹いていた風がさらに強まり、正面から吹き付けている。

「急げ！」

いわずもがなのことを叫んで、走る速度を上げたヨブは、アシェリが何かに気を取られて足を緩めたことに気がついた。

「あれは、なんだ」

アシェリが指さした先で、霧の合間の地面が蠢いていた。

説明する余裕はなかった。ヨブは怒鳴った。

「いいから走れ！」

走る二人の足元で、大地から緑の萌芽が顔を出して、見る間に丈を伸ばしてゆく。そこから葉が広がり、太陽の光を弾いて煌いた。

草が次々と芽吹いていく。その周りを飛びまわる、虫のようなものも、流れてゆく視界の隅をよぎった。驚きにアシェリが息をのむのが、ヨブの耳に聞こえたが、かまってはいらなかった。

洞穴の周りには、出るときには見かけなかった緑の草々が、朝陽を受けて葉を揺らしている。その上を駆け抜けて、二人は洞穴に飛び込んだ。

それまでの眩しい光景とうってかわって、洞窟の中は暗かった。

乱れた呼吸が収まるまで、二人はいつとき、無言で肩を上下させていた。

奥のほうで驢馬がいなくなのが、かすかに聞こえている。困憊した足を引き摺るようにして、ヨブは洞穴の奥へと向かった。そのあとに続きながら、アシェリが口を開いた。

「さっきの草、あれは、なんだったのだ」

「いったらう、この辺りにも、命がないわけではないのだと」

ヨブは言葉を切って、歩きながら水を飲んだ。喉がひどく渴いていた。アシェリはといえば、疲れよりも驚きが勝つのか、見えるはずもないというのに、何度も入り口のほうを振り返っている気配がした。

俺も詳しいわけではないが、と前置きして、ヨブは説明した。

「あれはどうやら、ああした植物なのだ。普段は地の中に隠れている。だが、ふつう草木というものは、陽の光がなくては生きられないものだろう。だから夜明けの、まだ辺りが灼熱の大地へと変わる前のわずかな時間だけ、外に顔をのぞかせるようだ。次の日に外に出ると、すっかり枯れきって土にまぎれ、元の姿の想像もつかない」

アシェリはいつとき沈黙していたが、やがてぽつりと呟いた。「あの断崖にも、同じような草が生えるのだろうか」

ああ、多分な。うなずいて、ヨブは驢馬の足元においていた荷から、食料を取り出した。あの場所で夜明かしするつもりなどなかったから、一晩何も食べていない。ひどく空腹だった。

包みを押し付けると、アシェリは黙って暗闇のなかで、それを手元に引き寄せた。硬くなったパンを、水で喉の奥に押し込むようにして、二人は食事をとった。

「さっき、あの草の生えていた場所を覚えたか。発つときに、少し掘ってゆこう」

「どうするんだ」

「食うのさ。地面の下の茎に、こぶのような芋がある」

へえ、と感心して、それからアシェリは少し笑った。「空腹も忘

れていたようだ。今ごろ腹が減っている」

「そうだろうな、あの様子では」

呆れて見せてから、ヨブは水を飲み、そして息を吸い込んだ。今度は、話すべきことは自然に口から滑り出てきた。

「ずいぶん、寡黙な男だった」

途端に、アシェリが神経を張り詰めてこちらの話を聞いている気配が、暗闇の中で感じられた。ヨブは語り急がないようにと、つとめてゆっくり話し出した。

イーハという名は、夜明けという意味だと、あの男はいった。たしかに砂漠の夜明けを思わせる、濃い青の眼をしていた。涯の海を見たいという、その理由については、頑として話さなかった。ちょうど、昨夜までのお前のように。

ただ、そうだな。後になって思えばひどく顔色が悪く、それに、痩せていた。年老いているようにも見えないのに、そのわりに皺が多く、もともとこれほど痩せていたわけではないのだろうと思ったのが、印象に残っている。いまにして思えば、もしかすると最初から、生きて戻るつもりがなかったのかもしれない。

最初にいったが、とにかく口数の少ない男だった。こちらから何か話しかければ、じっくり考えて、言葉少なに返事をした。砂漠の旅には、あまり慣れていないようだった。まだ若造の俺から、あれこれと頭ごなしに指図をされても、ちっとも気を悪くする様子がなく、真剣に耳を傾けていた。

あの男も俺の名を、いい名だなといった。

言葉こそ足りなかったが、それは偏屈というよりも、言葉で語る前に行動であらわす男なのだと、俺の目にはそのように見えていた。さて、そうとはいっても、いまだ世間をろくに知らぬ、若造の目だったからな。どこまで当てになるかはわからないが。お前の目には、どのような見えていたのだ。……いや、いい。無理に話さなくても、

いいさ。

俺はあの男のことが、嫌いではなかった。お前の故郷でどうかは知らないが、そうした人間、行動で語る男は、砂漠では尊敬されるものだ。ああ、そうだな。誰にもいったことはなかったが、俺はあの男に、憧れていた。

お前もそうだったように、イーハはこの海辺に近づくにつれて、ますます口数が少なくなっていくた。あのとき、あの男はいったい何を考えていたのだろうか。あとになって何度も考えてみたが、いまでもよくわからない。

イーハはこの涯の海までやってくると、さっきの丘よりもさらに先、あともう一步を踏み出せば真っ逆さまに落ちるだろうという、断崖の際まで歩いていった。あの場所はいつも、海に向かって風が吹いている。危ないからよせと俺がいつても、それを無視して、ずっとそこにとどまっていた。吹き上げる蒸気が、熱くはなかったのだろうか。そうして何かを見通そうとするように、じっと視線を遠くへ向けていた。

夜明けの色をした眼は、海面ではなくその向こう、涯の海のさらに果てを見通そうとしているかのように、俺の目には映った。どうせ蒸気のせいで、何も見えはしないというのにな。

海の向こうに、いったい何があるのだろうか。あのような恐ろしい場所の先に、見るべきに値するような何かが、果たしてあるのだろうか。

お前も、呆れるほど食い入るように、海を見ていたな。あれは、父親の面影ばかりを探していたのではあるまい。

蒸気の吹き上げる海を見つめたまま、あの男は夜明けが迫っても、腰を上げなかった。何をどういっても、俺が痺れをきらして腕を引いても、かたくなにその場から動かなかった。そして、ひどく静かな口調で、俺に案内の礼を告げた。おかげですっと見たかったものを、この目で見ることができたと、イーハはいった。ここまで連れてきてくれたことに感謝する、お前はもう帰るといい。お前の生ま

れ育ったというあのオアシスで、なすべきことがあるのだろうか
と。

ぎりぎりまで俺はその場にとどまって、あの男を説得しようとした。だがイーハは何をいっても、頑として耳を貸さなかった。殴り飛ばして、無理やりかついでも連れてゆこうかと思ったが、大の男、それも自分よりもよほど体の大きな男をかついで、陽の昇る前に戻ることなど、到底できないと思った。だからといって、一緒に死んでやるわけにはいかなかった。

俺は友を見捨てて、夜の海辺に背を向けた。

次の晩、再びあの海辺に戻って、俺は誰もいない崖を見た。あの男の座っていた場所のすぐそばまでいつてみたが、そこには、あの男がいたという何の痕跡も、見つけることはできなかった。海を覗き込んでみても、お前も見たとおり、あの蒸気だ。いくら目を凝らしても、靄の向こうに、何も見いだすことはかなわなかった。

あの夜明け、友を置いてひとり逃げながら、黎明のなかで、諦めきれずに何度か振り返った。やがてずいぶん遠ざかった頃に、イーハが俺のほうを振り返って、ゆっくりと手を振った。その顔は、どうしたわけか、微笑んでいるように見えた。

あの笑みの意味が、お前にわかるのならば、俺に教えてくれないか。イーハの息子よ。

暗闇に慣れた目に、アシェリがゆっくりと首を振ったのが映った。長らく会ったこともない父親の心がわからずとも、当然のことだ。ヨブは短く謝って、口を閉じた。

息子がいるということを、イーハは話さなかった。このような地の果てで、たったひとりで最期のときを迎えるよりも、なぜ故郷に帰って、この男に顔をみせてやらなかったのだ。ヨブは十年越しに、胸のうちに友の面影に呼びかけたが、当然ながら暗闇の中からは、何の答えも返ってはこなかった。

「さあ、もう休め。外が冷えたら、今夜は出立を急ぐぞ。芋も掘らねばならないからな」

「ああ、そうだな」

そういつてすぐに横になったわりには、アシェリはなかなか眠れないようだった。硬い岩の上で何度も寝返りをうつ気配を、ヨブは聞いた。

「寝付けないのなら、驢馬の腹を枕にして眠るといい」

見かねてそう声をかけると、返事は返ってこなかったが、黙ってそのようにする気配があった。

暗闇に沈む岩天井をみつめながら、ヨブは十年前の帰途を思い出していた。

ひとりきりでオアシスに戻ったヨブに向かって、長は厳かにうなずいて、よくやったと、そういったのだ。

俺は殺してはいないと、ヨブはいった。だが長は、わかっているとうなずいて、満足そうに微笑むばかりだった。その眼を見て、それ以上の言葉を、ヨブは飲み込んだ。

長は、ときにぞっとするほど冷酷になる。しかしそれは、故なきことではない。その残酷さは、オアシスを守るためにこそ発揮されるものだ。ヨブにもそのことはよくわかっている。

だがそれでもあのとき、ヨブは声を上げていたかった。俺があの男を殺したのではないと。

帰りの道もまた、長かった。同じだけの日数をかけて岩砂漠を越え、オアシスを辿らなくてはならない。ヨブは星を見上げながら、胸のうちに旅立ってからの日数を数えた。

アシェリはもとの陽気な男に戻り、道々、見かける生き物や、星の名前など、思いつく端からヨブに訊ねた。

「それにしても、わかったようなことをいたくはないが……」

話が途切れたとき、ヨブは前置きをして、それからいった。「父

親というものは、勝手なものだな」

己の口からこぼれ出てみれば、言葉はあまりにも空疎だった。ヨブは口に出したことを後悔しながら、空を仰いだ。

北の空には、ほのかに赤みをおびたアス・ディハル《三の導きの星》が、煌々と輝いている。言葉はいつでもむなしく、ただ星だけが、変わらずたしかな道を示してくれる。

だがアシェリは、思いのほか静かな声で、話の先を促してきた。

「あんたが生まれる前に死んだという親父さんのことか」

ヨブはかぶりを振った。残されるわが子のことを思いもせずに、さつさと死んでしまう男たちのことも、勝手といえば勝手に違いなかったが、頭にあったのは、そのことではなかった。

「いいや。俺は、不義の子なのだ。……俺の父は」

言いよどんで、ヨブは唇を湿した。それから続けた。

「俺の父親は、戦で死んだ男ということになっている」

それは、部族の人々の前では口に出来ないことだった。だが、いや、だからこそ、この男に聞いてほしいような気がした。

「だが、皆知っている。それでは計算が合わないということを。」

そして長が、夫を失ったばかりの母のもとを、何度となく訪れたことも」

「では、あんたに名前をつけたのは……」

ヨブは皮肉に笑って、アシェリの言葉をひきとった。「いつか息子が生まれたら、ヨブと名づけよう。そう話していたという、亡き夫がつけた名を、母はそのまま、不義の子へと与えたのだ。そ知らぬ顔をして」

オアシスで帰りを待つ老母の顔を思い浮かべながら、ヨブは眉を寄せた。

「女が外を出歩くのが当たり前だと、お前がそういつたとき、俺はそのことを馬鹿にしたな。だが、女を家の中に隠したところで、何のことはない、それでも俺のようなものは生まれる」

驢馬が水を求めて、顔をすり寄せてきた。ヨブは休憩にするぞと

いって、まだ熱のなごりの残る岩の地面に腰を下ろした。

火を熾し、残り少なくなった珈琲の用意をしながら、アシェリが珈琲の苦さにたびたび顔をしかめていたことを、ヨブはふと思い出した。「お前は白湯にするか」

「いいや、だんだんその苦いのが、くせになってきた」

アシェリは笑ってそういった。部族に独特の、とびきり香りの立つやり方で珈琲をいれながら、ヨブは軽い調子を作っていた。

「それにしても、女とは怖ろしいものだ。口を拭ってこれは誰その子だといえ、それで通ってしまうのだから」

「ははあ。どのような土地にいても、そればかりは変わらないものか」

ヨブの意図につきあって、アシェリは声を立てて笑った。それやらやはり苦そうに、珈琲をちびちびと舐めた。

「しかし、お前たちのように女が家を継ぐのであれば、相続には争わずに済むかもしれない」

「いや、どこでもそうしたことは、こじれるものさ。女が生まれず、家が絶えることもあるし」

アシェリはそういって、にやりとした。「じつは俺のところが、まさにそうだ。生きている間に、片付け方を考えておかねばなるまいよ。とはいえ、あるのは小さな家がひとつばかりだ。まあ、娘にやってしまうだろうなあ」

面倒ごとのようにいいながらも、目を細めるアシェリの声は、楽しげなものだった。

「なんだ。お前、娘がいるのか」

あきれてヨブがいうと、アシェリはうなずいて、北の空を仰いだ。そちらに故郷があるのだろう。

「ああ。まだほんのガキだが。そろそろ一度戻って、顔をみせてやらねばなるまいな。ふ、しばらく見ない間に、でかくなっているんだろうなあ」

まったく父親というのは、つくづく身勝手なものだ。アシェリは

ヨブのいった言葉を繰り返して、くつくつと喉で笑った。

「それならば、さっさと帰ってやれ」

呆れ混じりにそういいながら、ヨブはため息をついた。アシェリはそうだと笑って、顔を上げた。

「お、あれはなんだ」

アシェリが指さしたのは、遠い崖にのぞく、古い廃坑の入り口だった。もう使われていないもので、特別に知られて困るものでもない。ヨブは説明してやりながら、つくづく呆れた。

「それにしてもお前、そのように好奇心をむき出しにしているのは、嫌がられることも、物騒な目にあうこともあるだろう。興味のないふりも肝要だぞ。秘密を探られたくないものは、ときに過剰なほどに、慎重を期するものだ」

そう言いかけると、アシェリはにやりとした。

「ああ、あんたも、何度か物騒な顔をしたものな」

ヨブはぎょつとして、思わず顔をこすった。

「そうか？」

「ああ。……だが俺は別に、あんたらの秘密だかお宝だかに、興味はないぜ。何を隠したがってるのかは、まあ、聞かないほうがいいんだろうな」

両の掌をひらひらさせて、アシェリは人の悪い笑い方をした。思わずため息をついて、ヨブは首を振った。

「お前は案外、油断のならないやつだな」

アシェリはからからと笑って立ち上がり、外套の土ぼこりを払った。

迷った挙句、ヨブはファナ・イビタルよりもひとつ手前のオアシスで、アシェリと道をわかつことにした。

長が、アシェリを生かして連れ帰ったことをどう受け止めるか、そのことを考えたとき、心配はいらないと説得できるだけの自信は

なかった。長が話を信じた振りをして、その晩にアシェリの枕元に蠍の二、三匹を忍び込ませたとしても、自分は驚かないだろうとヨブは思った。

本来であれば、砂漠の旅は隊商とともにゆくのが一番安全だ。危険な獣もいれば、道に迷うおそれもある。信頼の置ける商人に渡りをつけて、砂漠の外まで安全にゆけるように、交渉してやりたいところではあった。

だがヨブはアシェリに星の辿り方と、食料や水の按配を細かく言い聞かせて、ひとりでゆかせることにした。つきあいのある商人に頼めば、いずれ長の耳にも入りやすくなるだろうから。もったも、どことも知れぬ遙かな故郷に向かった人間を、追うすべもないだろうとは思えたが。

満天の星空の下、荷を担ぎなおしながら、アシェリはいった。

「案内人が、あんたでよかった」

親父の話も聴けたことだしなと、アシェリはそんなふうに笑って、名残惜しそうに、いつとき驢馬の腹をなでた。

「気をつけてゆけ」

「ああ。また会おう」

そういつて手を差し出したアシェリに、ヨブは思わず苦笑した。もう会うこともないだろうに、それでもそのようにいうのが、砂漠の外の流儀なのかもしれないなかった。だがヨブは、アシェリの手を握り返しながら教えた。

「このあたりでは、こういうのだ。星の導きが、お前とともにあるように、と」

アシェリは破顔して、同じ言葉を繰り返した。

何度となく振り返りながら、アシェリは宵闇に包まれた砂漠の道なき道を、ゆつくりと遠ざかっていった。

その姿が遠く離れ、とうとう見えなくなると、ヨブは驢馬の背を叩いて、自らの帰るべきオアシスへと足を向けた。それから胸のうちで独りごちた。さて、怪訝な顔をするだろう長へと、下手な話を

聞かせてみせねばなるまいな。あの男が秘密をかぎつけて吹聴する心配はもういらないと、納得してもらうためには。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4887y/>

とこしえの黄昏の国

2011年11月14日03時27分発行